社会科学論集　第136号　2012.6

《特別論文》

交流によって自然と社会をとり戻す

── 大学と地域の交流・協働 ──

本　城　　昇

はじめに

経済のグローバル化，高齢化などが進展する中で，地域社会は逼塞しつつある。都市では，商店街のシャッター街化が進み，また，農村では，農地の耕作放棄が加速し，山林の手入れもままならず，自然の荒廃も進んでいる。人々のつながりは弱まり，個々人がますます孤立し，相互扶助する余裕もなくなりつつある。他方，国立大学は，厳しい財政状況の中で毎年国からの交付金を減らされるなど，大変厳しい状況にあり，埼玉大学にあっても，どのような個性をもって，地域に魅力のある存在として存続・発展していくかが重要な課題となっている。

そのような状況の中で，筆者は，この1年間，大学が地域の人達の協力を得て，学生達が地域の人達と交流し，地域の活性化を考える「交流型授業」を試みることができた。授業を通じて，筆者も学生達も多くの地域の人達と出会い，学びの楽しさを満喫できた。交流型授業を実施してみて，地域に大きな影響を及ぼすことができる国立大学の埼玉大学が地域おこしや地域のコミュニティーの形成に大きな役割を果せるのではないかと強く感じた。

この「交流型授業」を実現できたことは，それまで，私が有機農業の優れた思想性に魅了され，ゼミや授業で，学生達が有機農業に触れ，有機農業とは何かを考える機会を設けてきたことが深く関係している。また，何よりも，一昨年（2010年）9月に，東浦和にお住まいの教育学者の大田堯先生を訪問し，見沼田んぼのことをお聞きし，先生が見沼フィールドミュージアム構想を持たれていることを知って，その重要性を感じ，埼玉大学も見沼の広大な緑地の保全活動にかかわるべきだと強く思ったことによる。

交流型授業として，昨年度前期は，見沼田んぼの保全に尽力されてきた市民活動団体の方々の積極的な協力を得て，学生達が見沼田んぼをガイド体験する授業を実施し，昨年度後期は，その後継の応用授業として，紙芝居を創作・実演する授業と足尾銅山鉱毒被害地を訪問する授業を実施した。受講学生達は，授業に積極的に取り組み，地域の人達と出会い，つながる楽しさ，地域を具体的に知る楽しさを知り，主体性を持って自主的かつ具体的に地域との交流のあり方や地域社会のあり方を考える良いきっかけになった。

本稿では，この交流型授業を実施するに至った経緯とその実施状況及び成果を紹介し，内実のある交流によって，自然と人，人と人が柔和に出会い，つながる優しい社会を取り戻す，そうした地域おこしに大学が大きな役割を果たす可能性を持っていることを指摘することとしたい。

1　有機農業との出会い

筆者が有機農業とかかわることになったきっかけは，1987年である。当時，私は，公正取引委員会に勤務し，不当表示の取締り担当課長をしていた。同年7月末，ある一人の少し高齢の婦人が私の課を訪れた。その婦人は，東京の消費者団体の代表者であった。その婦人が言うには，東京・

神田のヤッチャ場（青果物の中央卸売市場）では，「有機栽培」という段ボールがうず高く積まれており，その中にはワラ一本入れただけでそのような表示をしているものがあると聞く，これは，不当表示であり，放置しておいてはいけないという趣旨のことを話された。当時，私は，その話を聞きながら，運命的なものを感じた。大学の農学部農林経済学科を卒業して以降，長い間農業とはかかわりのない道を歩んできたにもかかわらず，私にこのような話が飛び込んでくるとは，偶然とはいえ，あまりにも偶然過ぎる気がしたからである。実際，その後，有機農産物の不当表示問題を皮切りに，有機農業に関する政策全般に関心を持ち，埼玉大学経済学部に移ってから，その研究にもかかわることになる。

私は，その時，公正取引委員会で前述の不当表示の問題を持ち込んできた婦人の話を聞きながら，有機農業に長年携わったわけではない人がこうした問題を提起していることに不自然さを感じた。私は，やはり，有機農業に携わってきた人達自身がどう見ているのか知らなければ，問題の本質を正確にとらえられないと思った。丁度，大学で同窓であった友人が農林水産省農業総合研究所（当時の名称は，農業総合研究所）で有機農業の研究をしていたので，彼に有機農業を知るにはどのような本を読めばいいのか尋ねた。彼が薦めたのは荷見武敬・鈴木利憲著『新訂　有機農業への道』（楽游書房，1979年）であった。これを一気に読み，日本の有機農業が，1970年頃からの関係者による苦節によって築かれたことを知った。そのことを知ると，ますますいい加減な知識でこの問題を取り扱ってはならないと思った。この本がきっかけとなって，その後，有機農業関係者を知ることとなる。また，表示規制の観点から単に表示がどのようになっているか把握するだけでなく，有機農業の実態もしっかり把握したいと思った。そのため，千葉県三芳村等を訪れ，有機農業関係者とお会いし，お話をうかがった。これが大変良かった。今でも，そのときの新鮮な感動が残っている。有機農家の方々の雰囲気を知ることができたばかりでなく，その時の有機農家の方々の晴れやかな表情や純朴さが忘れられない。本質に接する清新さ，それがあると思った。自然と共に生きていく有機農業の持つ深い魅力が人を魅了し，人の心を揺り動かし，その人間性を磨くのだろうと思った。

そして，有機農業関係者の方々を知っていくうちにさらに驚いたのは，その人達が，「食べ物は商品ではない。食べ物や農業を金儲けの手段としてはならない。有機農業は単なる栽培方法ではなく，生産者と消費者が顔と顔の見える有機的な人間関係を結んで，自立と互助の精神に立って人間性を取り戻すものだ。有機農業（つまり本来の農業）は，人間の仕事としてもっとも人間的で本質的なものなのだ」と考えていることを知ったことである。いわば，有機農業は，自然と社会に対する人間の「愛の実践」としてとらえられている感じであり，今の時代に，こんな真面目なことを考えている人がいるのかと思うとともに，大変感動した。有機農業は，単なる無農薬・無化学肥料で栽培する栽培方法といった狭いものではなく，自然と有機的人間関係の社会をとり戻す本質的なものだと直感し，そのことに魅了された。

それでは，ここで，どうして日本の有機農業がこのように自然と社会をとり戻す本質的な問直しという思想性を備えたのか，その経緯を紹介することとしたい。

(1)　提携の生成と展開

日本の有機農業は，消費者が有機農家から直接有機農産物を共同購入する形で始まる。消費者側は，この共同購入により生産者と直接結びつき，「顔と顔の見える関係」の中で相互の信頼関係を形成・保持しながら，生産者から有機農産物の継続的な供給を受ける。この形態は，「提携」と呼ばれる。日本の有機農業において，この「提携」が広がった理由は，その草創期である「1970年代前半には，安全な食べ物を求める消費者たちは多くの場合，全国に点在する有機農業生産者を探しあてて結びつき，産直・共同購入方式によって有機農産物を手に入れるしか方法がなかった」[(1)]ことにある。

この「提携」にかかわる消費者達は，1970年

代前後において，食品添加物を添加しない安全な食品の供給は既存の供給ルートでは受けられないという不安から，自ら生産側に直接働き掛け，無添加の食品を生産してもらい，それを地域で共同購入しようとした消費者運動の流れを汲む。この消費者達が安全な食べ物を求めていたことは，その団体の名称に端的にあらわれている。「安全な食べものをつくって食べる会」，「食品公害を追放し安全な食べ物を求める会」等である。しかし，彼らは，安全な食べ物を求め，共同購入していくうちに，自分達の食生活が便利さを追求した安易なものであり，それが農業に歪みを与え，安全な食べ物の供給自体を困難にしていることを知る。

その辺りの事情について，「提携」に長年携わってきた消費者側のリーダーの白根節子（埼玉県の「所沢生活村」という提携組織の主宰者）は，その著書において，消費者の生活が「毒づいた豊かな生活」であったことを「私たちが農とかかわりを持ち，本当の食べものを求めたとき，はっきり認めざるをえなかった」とし，「まず，都市生活者自身の生活が問い直されなければならなかったことが，体験として思い知らされました」としている。自ら主宰する有機野菜の共同購入の会をやめていく人達の共通の理由は，いずれも「キャベツを食べたいときにキャベツがなく」，「収穫に合わせた食生活にしろといわれても，夫や子供に，何日も同じ物を食べさせることはとても辛い」，「私は我慢できても，夫を説得するのは無理です。とくにアオナばかりたくさん献立すると，本当にいやがられます」というものであり，首都圏に住んで“農”とは「かかわりのない」消費者たちが便利さや自己の食欲に即応した勝手な食事内容を改めることは容易なことではなかったとしている[2]。続けて白根は，「都市生活者も生産の現場におもむき，知ることです。土を嫌い，ことごとくコンクリートで覆い尽くしてきたのが都市です。大地から遠のき，自然から遊離した生活からは，生産を理解することはできません。……自らも耕す人間にならなければ，生活を変革すると言っても，頭だけで終わってしまいます」としている。

これは，提携に携わった消費者達の基本的に共通した経験である。彼らは，有機農家と直接かかわることによって，消費者側が自己の好みの献立を優先した食生活を見直し，土壌に消費者の口を合わせる，つまり農地の自然条件に即した食べ方をし，有機農家とともに歩んでいくことの重要性を学ぶ。

一方，この提携は，有機農業に取り組もうとする生産者にとっても大きな励みとなった。山形県高畠町で有機農業を営む星寛治は，消費者への「なれない配送をすることは，作物をつくる以上の困難を伴った。けれど，……消費者との相談の中で自ら価格をつけ，中間の流通を介さずに提供できることは，まさに画期的なことであった」と述べている[3]。そして，星は，「一年を通して消費者の台所に直結することが望ましいとするならば，農家の生産形態も変えなければならない。つまり，作物を限定した大量生産の形から，多品目少量生産へと転換することが求められる，併せて，資源の再生循環をはかるなら，必ず家畜を入れ，有畜複合経営をめざすことが望ましいという考えに到達した」とし，提携により農家側の農業経営のあり方が大きく変わったとしている。

⑵　本来あるべき姿の農業

この提携の推進において重要な役割を果たすのは，一楽照雄と日本有機農業研究会である。日本有機農業研究会は，一楽照雄の呼びかけにより1971年に設立され，「有機農業」という呼称は，この研究会の結成に当たって，一楽が名付け親となって使われ始めたものである。これが，日本において「有機農業」という呼称が使われた初めである[4]。

この「有機農業」という呼称は，研究会が探求しようとする「本来在るべき姿の農業」を簡潔に表現する呼び名として選択されたものであり，現行の農法が余りにも無機的であることへの反語的意味合いを含めたものであったとされる。一楽は，この言葉によって「正しい農業あるいは本当の農業，あるべき形の農業とでもいうようなことを追及しようというわけですから，本当は有機農業という言葉自体がなくなることが望ましいと思う」

と述べている[5]。この日本有機農業研究会が，それまでに全国に自然発生的に存在していた有機農家と安全な食物を求めていた消費者グループの消費者，それに有機農業に関心を示す学識者を結びつけ，「提携」を推進する中心的な存在となる。

こうした「有機農業」という名称の経緯からしても分かることは，有機農業を特別視せず，付加価値農業としてではなく，正しい農業，本来在るべき姿の農業としてとらえていることである。同研究会の設立趣意書は，経済合理主義の見地から促進された農業の近代化が生産者の健康を害ない，環境破壊，地力減退等を招き，消費者には残留毒素による脅威を与えたとし，このような見地からは，わが国農業の今後に明るい希望や期待を持つことは甚だしく困難であるとし，経済合理主義を強く批判している。

日本有機農業研究会は，「提携」の原則を1978年11月に「生産者と消費者の提携の方法」10ヵ条（以下，「提携10ヵ条」という。）にとりまとめ，定式化している。その中で，「生産者と消費者の提携の本質は，物の売り買いの関係ではなく，人と人との友好的な付き合い関係である」とし，農産物を商品として取り扱わず，生産者と消費者が顔と顔の見える中での信頼を土台とする相互扶助そのものであるとする。

一楽は，食生活は人間生活の「もと」であり，農業は人間の仕事としてもっとも人間的なものであり，この仕事を金儲けの手段としてはならないとし，提携について，「農家が作った物は先ず自家で消費して，余ったものを消費者に提供するという関係なんです。それに対してはもらった人からの謝礼が行われるのが当然であり，生産者と消費者の間では，売買取引ではなく，贈与と謝礼の関係，提携の関係が生まれるのです」とする。モノの売り買いであれば，利害で取引する以上，売手と買手の利益が相反する関係となるが，そうではなくて，「相互扶助の原理に則って，自分が犠牲を払うのではなく，どちらかといえば時には自分も得をしながら，相手に得を与えるというよろこびこそ，ほんとうのよろこびなのです」としている[6]。この考え方が提携10ヵ条にも強く反映されている。

このように，一楽や日本有機農業研究会は，経済合理主義の視点に立って農業を見ることを排し，有機農業を付加価値農業としてとらえることに反対し，有機農業を本来あるべき姿の生業としての農業ととらえなければならないとする。そして，そこでの生産者と消費者の関係は，モノの売り買いの関係であってはならず（食べ物を商品にしてはならず），相互扶助の原理に則った顔と顔の見える中での贈与と謝礼の関係，提携の関係であるべきだとする。一楽は，相互扶助は，協同組合の基本原理であり，協同組合思想が有機農業運動の思想的基盤となるべきであるとする。この思想が有機農業における生産者と消費者の関係に正に合致していると見る[7]。一楽は，農林中央金庫に長く勤め，退職後は協同組合経営研究所の理事長を勤め，協同組織はいかにあるべきか不断に問い続けてきた実務家兼理論家である。その一楽にとっては，提携は，追い求めてきたあるべき姿の協同のあり方でもあったのである[8]。

(3) 自給・自立と互助

さらに，一楽の考え方において留意されるべき点は，自給である。一楽は，提携について前述のとおり「農家が作った物は先ず自家で消費して，余ったものを消費者に提供するという関係なんです」と述べている。これは，生産者が自給することを前提とし，その上で，消費者がその自給に協力する形で自らの消費生活をおくることを求めている。あくまでも自給を根底に置いた思想である。日本有機農業研究会も，有機農業と自給は不即不離の関係にあるべきであるとし，同研究会が2000年2月に設定した有機農業の基準においても，「有機農業のめざすもの」として「食料の自給を基礎にすえ，……地域の自立を図る」とし，地域自給とそれによる人と地域の自立を極めて重視している。有機農家と消費者の提携においては，顔と顔の見える関係の中で，地域自給と人及び地域の自立を図ることがその理念となっている。

提携は，有機農家にも，消費者にも，自給・自立できる力，あるいはその実現可能な潜在力を持

つことを可能にする。有機農家にとっては，多品目の作物を栽培することにより，自らの食生活をまず自給し，その余剰を消費者に提供することにより，自然災害にも経済的なリスクにも備える対応力をつけ，農家経営の自立性と生活の持続性を維持することが可能になる。ところが，農家が自らの農場全てを単作型の商品生産にしてしまうことは，商品経済にその経営のすべてを委ねてしまうことになる。農家は，大きな経済的なリスクを抱え込むのみならず，自然にも大きな負担をかけてしまう。しかし，その農家の農業が，外部資材に多くを頼らない有機農業であって，多品目の作物を栽培し，農家自らも自給できる農業であれば，経済的リスクに備えることができ，農場では自然循環が維持され，その農家は，自然の汚染と自然の収奪を避けて，経済的にも自立した持続的な農業を営むことが可能となる。そして，自己の農場を多品目栽培により自給できる農場とし，その余剰を提携により信頼関係をとり結んだ消費者に届け，その食卓を支える経営を営めば，経済的なリスクを抱え込むことなく，消費者との間で自然の恵みに感謝しながら人間的に交流し，思いやりのある親愛な人間関係をとり結ぶことができる。

消費者にとっても，有機農家に出向き，自然を堪能し，有機農家と親戚のように付き合うことが可能になり，有機農家を中心として消費者相互の人間的な交流も進む。消費者は，自らの食生活を正すのみではなく，農的暮らしを身近なものとし，有機農家の助言を受けながら，その意欲次第で自給菜園を営むことも可能になる。命の糧である食料を自給する現実的な潜在力を身につけておくことは，失業したとき等に，自らの生活を維持する可能性を高め，人生において，自己の良心に従った自立した生き方を貫く心の支えとなる。

提携は，自然の恵みに感謝し，人々を結びつけ，人々が相互に思いやる基盤となる。人それぞれが自立性・自主性を持てる状況を意識的につくり出し，心に余裕を持って他者と結びつき，困った場合には互助し合えるところに，本来の共助が成立し，自然にも，人にも優しい社会環境が成立する。

一楽は，日本有機農業研究会設立から数年経った1976年に，「人間は本来，一人一人が切り離され孤立した存在ではなく，社会的に共存共生する存在です。ところが，資本主義の発達にともなって競争社会が形成され，弱者はますますしいたげられ，正直者がばかをみる，弱肉強食の傾向が進んでいます。そのなかでは，ずるい者が得をし，正直者はうだつが上がらない，谷間に蹴落とされる。しかし，谷底から一人一人が這い上がろうとするのではなく，協同連帯して競争社会を是正する。協同の原則に則した分野を形成し，それを拡大していく。各個人がめいめいの利益を追求するのではなく，公正な関係をつくり上げていくことを，お互い手を携え，連帯して実現させる。これが協同運動の目的であり趣旨だと思うのです」[9]と述べているが，提携は，この人々の協同連帯そのものである。

2　有機農業の魅力

有機農業は，「提携」という有機的関係性を「見出す」ことにより，単なる農法や経営の領域を遙かに超えて，自然との調和の上に立脚した自立と互助という社会のあり方を求め，社会を変革する射程を獲得する。埼玉大学経済学部で2008年度から11年度まで非常勤講師を務め[10]，有機稲作で先進的かつ極めて優秀な農業技術を持つ有機農家の舘野廣幸さんは，一般的に有機農業は化学合成農薬と化学肥料を使わない農業と受け止められているが，表面的にはそうではあっても，実は，その本質は，農業や社会や生き方を生命や自然の法則に沿った世界に変えることにつながっているとし，「広大で深遠な世界観の転換にあると思う」と指摘している[11]。

そして，舘野さんは，「提携において生産者が農産物を育てる目的は，自分と消費者の健康で安全な生活と健全な環境の維持による幸福で平和の世界の構築である。……田畑はそのバランスを破壊しない農業を行うことによって，毎年安定した恵みを生み出す。……その恵みである農産物を共に分け合う仲間として消費者が関わるのである。生産者は消費者を思いながら必要な農作物を必要

な分量だけ育てる。消費者は商品として農産物を買うのではなく，田畑の恵みとしての農産物を通じて健康で豊かな生命の営みのためにお金を支払うのである」とし，「生産者と消費者は，直接に接することで，共に多くの情報を得ることができる。生産者は，消費者の家族や好みを知ることで，それを農産物の作付けに反映させることができる。つまり，提携においては生産者と消費者の情報は双方向性を持つことができるのである。相互扶助や互恵の精神はこうした相互理解の上に成り立つ。生産者は，わが子のような自分の農産物が消費者の元に届いて，美味しく食べられていることに喜びを感じるのである」と述べている(12)。また，「商品としての農産物の購入は，売買の決済という意味の言わば『縁切りのお金』であるが，提携のお金は有機農産物を通じて田畑と結び合うための『縁結びのお金』である」とも指摘する(13)。

このように，有機農業は，「提携」という有機的関係性を持つことにより，自然の恵みに感謝し，人々を結びつけ，相互に思いやり，人間として正しく生きる社会基盤となるといえる。つまり，「提携」の伴う有機農業は，人間が自然に対して畏敬の念を持ち，優しい透徹した眼差しを持ち，自然と調和して暮らし，また，高度な社会性を持って，自立と互助を実践し，人間性を発展させていく社会基盤となる強い魅力を持っているといえる。これは，前述の舘野さんの指摘のとおり，「広大で深遠な世界観の転換」につながる。

舘野さんは，「『有機農業』の持つ意味は，いのちある生き物たちに共通する『生き方』を求める過程でもあります。……有機農業への道を歩むことが，『有機的でない社会』を作ってしまった私たち人間がしなければならない多くの生き物たちへの償いの道だと思います。『有機農業』は『有機社会』へ，そして『有機地球』という平和な『有機世界』へ向かう第1歩なのではないでしょうか」と述べているが，その言葉は極めて重いといえる(14)。

提携により，人それぞれが自立性・自主性を持てる状況を意識的につくり出す。そこで，心に余裕を持って他者と結びつき，困った場合にも互助し合う。そうしたところに，本来の協働と共助が成立し，自然にも，人にも優しい社会環境が成立する。そして，そのような世界は，お互いを尊重する世界であり，分権的であり，大きな政治権力は必要でなく，他者や他の社会に対して暴力的，搾取的になることもない。私は，提携と結びついた有機農業は，こういった可能性と強い魅力を持っていると思った。

私は，公正取引委員会に勤務していたときから，この有機農業の魅力を強く感じていたので，1996年6月に公正取引委員会事務総局を退職し，埼玉大学経済学部に来たとき，機会があれば，有機農業を授業に取り入れ，学生達にも是非ともその魅力を感じてもらいたいと思った。

3　埼玉大学経済学部において

筆者は，埼玉大学経済学部では授業科目として経済法を担当してきたが，所属した学科が社会環境設計学科であったことが大変幸運であった。社会環境設計学科は，その設立の時代状況やその名称からして，自然を大切にし，人間性や人間関係を回復する社会を構想することを考究していく学科であり，この学科に所属することにより，経済法や消費者政策といった自分の担当分野に限定した狭い範囲の教育研究ではなく，自然と社会について広く深い観点から考え，教育研究を進めることができた。学生達は，環境や地域の問題に関心があり，私が強く関心を持っていた有機農業をゼミや社会環境設計論等の授業でとりあげることは，不自然なことではなかった。このため，私は，まず手始めに，ゼミ合宿でゼミ生達が夏休み期間に有機農家に泊まり込み，有機農業の現場を体験する機会を設けた。

(1)　有機農家での泊まり込み

まず，1998年の夏に長野県の八ヶ岳の麓にある有機農家の窪川さんの織座農園に3泊程度のゼミ合宿の形で泊まり込むことを始めた。ゼミ生達は，朝5時頃に起床し，雑草とりやジャガイモの収穫等の農作業や食事づくり等を一日中手伝い，

夜には有機農家のご主人やそこに来ている若い研修生から有機農業の魅力や苦労話を聞きく日程を過ごした。学生達は，すべてが物珍しく，また，有機のほ場だけではなく，添加物の入っていない調味料，石けん歯磨き粉を使用する等，窪川さんの日常生活が徹底して合成洗剤や化学調味料等の合成化学物質を使用しないものであることに驚いた。学生達は，経済法のゼミ生なのになぜ農業体験をさせられるのか不満を持ちつつ，しかも農作業で体力的に辛さも感じ，早く帰りたいとさえ思ったりする。しかし，自分なりに心の中でいろいろ考え，農的暮らしや有機農業の全体像を捉えていった。合宿を終える頃には，有機農家と消費者を結ぶためのハンドブック（写真１参照）を自分達のゼミ生全体でつくった年次のゼミ生達も出るようになった。この年次のゼミ生達は，2002 年 7 月に織座農園にゼミ合宿に行った学生達であり，そのハンドブックには，提携とは何か，提携で消費者と結びつく関東地域の有機農家の紹介，その連絡先，配送費用その他提携の条件が盛り込まれている。

このハンドブックの作成に中心的役割を果たした男子学生は，「織座農園に行き，窪川さんをはじめ織座農園の方々と出会いお話を聞いたりすることで，食の安全や環境に配慮した生活等，自身の考えを大きく変えさせるきっかけとなりました。そして，なによりも衝撃的だったのは，合宿中いただいた食事・野菜のおいしさでした。『なんでこんなに野菜の味が濃いんだ』と感動したのを，今でも覚えています。本物の野菜というか，これが本来あるべき姿なのかと思いました」としている[15]。そして，「一般流通とは異なる，消費者と直接結びつく『提携』の存在。単にものをつくって売る，そしてそれを買うといっただけの関係性ではなく，今失われつつある『人』と『人』が互いに結びつきあい，相互に助け合い，理解していく。合宿に参加し，今まで知らなかったことを多く学ぶことができ，同時に感動しました」としている。このため，「こういった新しい出会いから生まれた感動や『野菜はこんなにおいしんだ』というものを，もっと多くの方に知って欲しい。まだ当時その販路に苦慮されていた有機農家の方への恩返しから，製作に至ったのが『有機農業ハンドブック』でした」としている。

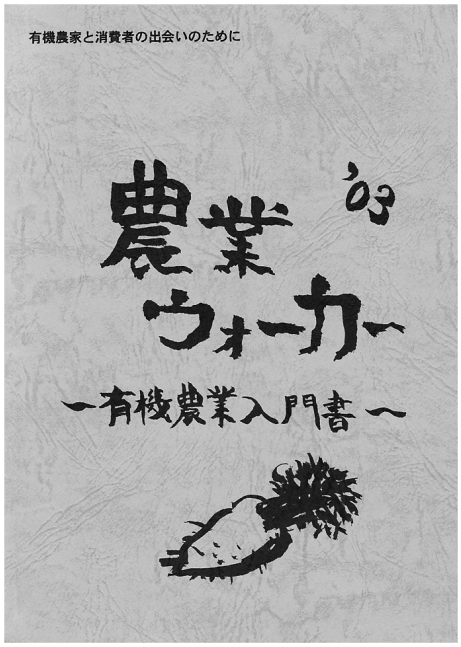

写真１　ゼミ生のつくった有機農業ハンドブック

ゼミ生達にとって，この体験が自ら有機農業を体験し，考える貴重な体験となり，彼らの大学生活の中で大変印象的で，心に残る良い思い出となっていることがはっきり見てとれた。そうした 2002 年頃，丁度，経済学部では，専門科目として「ビジネス実習」（2 単位）が設けられ，学生達はこの科目を履修する形をとって官庁，企業等でインターンシップを経験することが可能となった。このため，私は，有機農家での泊まり込みをインターンシップとして正式に位置付けてもらい，ゼミ生以外の経済学部学生にも経験してもらえるようインターンシップ担当の教員にお願いした。その結果，これまでとほぼ同じ内容で有機農家での夏期１週間（7 日間）の泊まり込みが「ビジネス実習」の対象として認められた。これ以降，私のゼミ生達は，3 年生の夏に必ずこのインターンシップを利用して有機農家での泊まり込み体験を経験することとなる。

インターシップの有機農家での泊まり込み期間は，ゼミ合宿よりも長くなったので，ゼミ生達は，より深く有機農業を体験でき，その滞在は教育効果のあるものとなった。その印象的な体験から，ゼミ生の中から，2008年度から2010年度にかけて大学院経済科学研究科で有機農業を中心とする学校ファーム，グリーンツーリズムあるいは流域自給を研究しようとする者が3名出ることになる。その一人で，グリーンツーリズムを研究することになった山本仁君は，2011年度提出の修士論文「日本のグリーンツーリズムの現状と課題」のまえがきで次のように述べている。

「私が，日本のグリーンツーリズムについて研究したいと思ったきっかけは，大学3年の夏休みに，長野県の有機農家へ泊り込みのインターンシップ（経済学部専門教育科目『ビジネス実習』としてのインターンシップ）に行ったことである。

わずか7日間のインターンシップであったが，私は，そこで温かい農家の方との出会いを通じ，大きな感動を覚えた。そこには，人への温かい思いやりや，自然を慈しみ，自然に感謝する気持ちがあふれていた。……その当時，農業への興味など全くなかった私は，インターンシップの初日，2日目には農作業も辛く，早く帰りたいとさえ思っていた。しかし，そんな私の心を動かしたのは，農家の方の農業や自然に対する真剣で誠実な姿であり，自然の中で，生き生きと毎日を楽しそうに暮らす姿であった。また，自分のことよりも他人のことを当たり前のように考えてくれる心遣いに本当に感動した。人との出会いの素晴らしさや，人間らしく生きることとはどういうことかを学ぶことのできた素晴らしい体験であった。しかし，私が感動したような，農家に宿泊し，大自然の中で自然への慈しみ，人との温かいつながりを感じられるような感動ある農的暮らし体験は，大学生のインターンシップ等のきわめて限られた範囲の人にしか与えられていないのが現状である。……そこで，都市生活者の誰もが気軽に農的暮らし体験にアクセスできるようにするにはどうすればよいか，そのことを検討したいと思っていたところ，都市生活者が農村で休暇を過ごす，グリーンツーリズムが日本で展開されていることを知り，その現状と課題を研究したいと思った。」

(2) 大学構内での堆肥づくりと有機菜園

夏期の有機農家での泊まり込みだけではなく，大学構内で有機農業を身近に体験できるようにすれば，より一層学習効果が高まるであろうと思い，2007年度からは，ゼミで，まず，経済学部研究棟の西端で衣装ケースを利用した簡単な堆肥づくりを始めた。堆肥づくりによる土づくりが有機農業の基本だからである。しかし，この衣装ケースによる堆肥づくりは失敗した。このため，2008年度からは，日本有機農業研究会所属の有機農家が一般市民でも堆肥がつくれるよう開発した堆肥枠(たいひわく)[16]を使用することに切り換え，落ち葉や生ゴミ，それに米ぬかを投入した本格的な堆肥づくりにとりかかった。これにより，堆肥をつくることができたので，次は，それを使用して野菜づくりに乗り出すことにした。

問題は，その場所であった。幸いなことに，教育学部の石田康幸先生（当時教授，現名誉教授）が教育学部敷地内にある花壇と附属農場の空きスペースで有機の野菜づくりをすることを快諾していただいた。農学の研究者には有機農業に対して批判的な方も多いが，石田先生は全く違い，環境に優しい農業に大変理解があり，場所の使用のお願いにあがったとき，すっかり意気投合した。

また，堆肥に欠かせない落ち葉については，経済学部に隣接した雑木林がクヌギやコナラの落葉樹の雑木林であり，落ち葉にこと欠かないことが分かり，以前には藪に見えた雑木林が可能性を秘めた自然に見え，経済学部は何と恵まれた自然に隣接していることかと，全く価値観が逆転する思いであった。すでに本学の施設管理課に経済学部隣接の雑木林について自然環境を保全し，必要な手入れをし，落ち葉を堆肥化し，椎茸の栽培もすることの許可を申請し，その許可を受けていたの

で，この林内の落ち葉を活用して堆肥をつくることを直ちに始めることができた。

生ゴミについては，本学の職員や教職員組合の職員に家庭で出たものを持ってきてもらった。そして，米ぬかについては，近くの個人経営の食品スーパーから学生が無料でもらってきた。

この落ち葉と生ゴミ等を利用した堆肥づくりに基づく野菜の栽培を体験することにより，学生達は，雑木林の落ち葉に食べ物残渣を混ぜて米ぬかで発酵を促進して優良な堆肥とし，それを土壌に返すという循環，雑木林と有機ほ場との不可分の関係性を自然に理解できるようなる。また，雑木林では，堆肥づくりで使う落ち葉集め以外に，カブトムシを前記舘野廣幸さんの所有の平地林から持ってきて，カブトムシの住む雑木林を目指して手入れするとともに，林の中で舘野さんの指導で椎茸を栽培することも試みた。さらに，埼玉大学学内施設のそよかぜ保育室の幼児達が雑木林で遊べるように林内のゴミ拾いと落ち葉集め等をして，同保育室との交流も試みることができた。

このように，大学構内で有機農業を曲がりなりにも体験できる条件が整い，ゼミ生達がその取組みを開始したが，学習効果から見ると，3年生夏期の有機農家泊まり込み体験のような顕著な効果が見られず，強制されて作業をさせられているという感が強かった。野菜づくりに積極的な関心を示したり，ほ場や雑木林の自然を知ろうという意欲的な姿勢は見られなかった。ゼミ生達は，2年生から大学構内でこの取組みを開始するものの，3年生夏期に有機農家での泊まり込みを経験して初めて，有機農業の魅力に感動するようであった。やはり，有機農家に泊まり込んでその全体像が見えるようにならないと，大学構内で堆肥づくりや野菜の栽培をするだけでは，ダイナミックな自然が感じられず，有機農業の魅力の全体像が見えないため，学生達は仕方なく作業だけさせられているという印象を持つのではないかと思われた。

そして，やはり，「経済法」のゼミでは，有機農業の魅力を学ぶことを目的としていないため，どうしても限界があると感じ，学生達に有機農業の魅力を理解してもらうためには，ゼミ以外でそのための授業を設けたいと思うようになった。

(3) 授業での取組み

多くの学生達に有機農業を知ってもらう最も簡単な方法は，座学による多人数教育である。ゼミにおいて大学構内で衣装ケースによる堆肥づくりにとりかかった2007年度に，座学として，非常勤講師による特殊講義「有機農業と暮らし」（2単位）を設けた。以後，この授業は，非常勤講師予算の制約で取りやめる2010年度まで続く。

この非常勤講師には，前述の舘野廣幸さんにお願いして，有機農業の実践とその魅力，また，それに関係する思想なども含めて講義していただいた。その中で，とうとう受講生の中から有機農家になりたいとする経済学部4年の夜間主の女子学生が出て，卒業後直ちに有機農家に研修に入った。

その女子学生は，この授業について，「私の有機農業との出会いは大学時代でした。やりたいことも見つからず進路に悩んでいた時期に，たまたま選択科目であった有機農業の授業を受けたことでした」とし，非常勤講師の舘野さんから授業で聞く「有機農業の暮らし方，生き方，思想はとても魅力的なもの」であり，「有機農業はお金持ちにはなれないけれど一番人間的な生き方である」という言葉を聞いて，「私もこんな生き方をしてみたいと思った」としている[17]。そして，「しかし，そもそも私には農業経験がなく，どうやったらなれるのかもわからず，女性には不可能とあきらめていました。ところが，先生による丁寧な説明，有機農家さんを見学させて頂き，有機農業を体験・勉強してみようと1年研修することに決めました。研修では多くのことを学びました。土に触れ，野菜の育ちを知り，提携の絆，農業者の努力・誠実さを感じることができました。この1年間学んだすべてのことが私の財産になりました。実家に戻り早速農地を借りてこの学びを実行している次第です」としている。

とはいえ，座学だけでは，受講した学生達は，単なる知識を得るにとどまり，農作業の実体験をしていないので，有機農業の魅力は極めて不十分

にしか伝わらないと思った。そこで，2010年度後期に，自分の持ち出し授業で特殊講義「有機農業と社会思想」をこの年度限りで設け，舘野さんの全面的な協力を得て，学生達が宮澤賢治等の有機農業の思想につらなる人の思想，生き方を学ぶとともに，ゼミで使用している大学構内の前記ほ場の一部を使用して，簡単な栽培管理を体験させることを試みた。ほ場を使用する関係から12名を上限とする少人数教育の授業であったが，受講した学生達には好評であった。

しかし，この授業は，有機農業にかかわる思想を学ぼうとするものであり，農作業体験については，少しでも土に親しんでもらい，有機農業を少しでも具体的に考えてもらいたいといった程度の簡単な体験に過ぎず，農作業のスキルを向上させようといった農場実習的なものではない。実際，1時間30分の授業時間，15回の授業回数という制約の中で，座学に併せて農作業体験の時間をとることは容易でない。授業で円滑に農作業に入れるための用具や資材等の事前準備も手間が結構かかる。しかも，利用できるほ場が狭いので，受講可能な学生数もわずかにならざるを得ず，また，有機農家の方の指導も必要であるので，手間や費用をかける割には効果的な授業にはなっていないと思った。農作業スキルの向上ということでは，たった2単位の授業では極めて不十分であり，前記ゼミでの取組みの方が時間的にもゆとりがあって，効果的であることが分かった。また，農作業スキルの向上だけに焦点を当て，それ以外のことをも狙いとしない授業であれば，それは，経済学部の授業に相応しいとはいえないと思った。

4　交流の重要さ

このように座学だけではない授業も試る中で，さらに学生達に有機農業の魅力を少しでも効果的に知ってもらうための授業として，他にどのようなものがあるのか考えていたとき，丁度，日本有機農業研究会の関係者から，東浦和にお住まいで高名な教育学者であられる大田堯先生が，埼玉大学として見沼田んぼにもっとかかわってほしいと希望されている旨の話があった。

(1)　大田先生との出会い

大田先生については，立派な教育学者であると以前からうわさを聞いていたので[18]，恥ずかしいことながらご著作もろくに読んでいないのに，大田先生に是非お会いして話を聞いてみたいと思った。大田先生のご自宅には，その日本有機農業研究会の関係者の計らいで，2010年9月に訪問することができた。

大田先生が有機農業にもご関心があることをその関係者から聞いていたが，先生は，そのご著書でも，「世界が著しく無機化に傾いている今日，有機教育をとりいれることが大きな課題ではないかと思います」とされ，「子どもたちが持つユニークな設計図というものが自ら花開いていくのを周りから助けていく。このような教育のドラマが演じられる舞台として自然との触れ合いを回復する，そのことが有機教育につながっていくと考えています」[19]とされているのを見て，有機農業について並々ならぬ期待をされていると感じた。

ただ，私は，見沼田んぼについては，大田先生とお会いするまで，その名前を聞いたことはあっても訪問したことがなく，どのようなところか全く知らなかった。先生を訪問して，先生が見沼田んぼ地域をそのままフィールドミュージアムとしたいとの構想を持たれていることを知って，広大な緑地空間の見沼田んぼが，子供達や市民が自然とふれあい，人とのつながりを取り戻す場として極めて重要であると直感した。

大田先生は，そのご著書で，「子どもたちから自然が奪われる，大人とのかかわりがはずされていくというような，つまり，生々しい感覚で自然に触れる，生身で人と触れ合う，そういう機会，経験の蓄積がなかったら，どのような立派な鍵になる概念であっても身につかない，ということになるのではないかと心配するわけです。……生身の人間と生身の自然というものとの交わりの蓄積なしに，つまり，そういう学習なしに，その上にピラミッドのような科学・文化を伝えようとしても，それは伝わるわけはない。……そういう

ことになってはいないかという憂いが私には深くあります」[20] とされ，自然と接する場としての見沼田んぼの役割を極めて重視されていた。有機農業に関わってきた私としては，地元の大学である埼玉大学が見沼地域にしっかりとかかわるべきだと強く思った。

とはいっても，見沼田んぼを対象に大学の動きとしてどのようにして行くのが良いのか全く分からず，2010 年 10 月から半年間，ゼミ生達を連れて，まずは地元の市民活動団体の人達に見沼田んぼを案内してもらい，どのような歴史を持つところか話を聞かせてもらうことから始めざるを得なかった。

⑵　素朴な形の交流の重要性

丁度，その頃，前記大学院生の山本仁君がグリーンツーリズムを研究し始めており，その実情を把握するため，私と山本君で埼玉県下や全国の農家民宿を中心とするグリーンツーリズムの取組みを調査していた。このことが授業をどのようなものとするか考え，その形態や内容を決めるときに大変役立った。

グリーンツーリズムの取組みを調査していくうちに，その地域の農村の魅力の発見・発信は，地域の人達と地域外の人達の協力があることによって容易になることが分かった。当該地域の内部の人達だけでは，その地域の魅力を相対化・客観化することが容易ではない面があるが，その反対に，外部の人達はその地域と自己の所属する地域との比較を通じて，斬新な視点でその地域の魅力を指摘しやすいということがあるからである。また，そうした内部の人達と外部の人達の相互のつながりは，その前提として，交流によってすでに心響き合う出会いとつながりが生まれていることが必要である。グリーンツーリズムの取組みを調査していて，次のように素朴な交流が重要であることが分かってきた。

① ビジネス化している農家民宿は，旅館や普通の民宿と同じで，純朴さ，人情味といった魅力がなくなっていている。これに対して，まず小中学校等の子供の農業体験教育旅行を受け入れた農家の農家民宿は，子供達との素朴な交流を通じて，子供達と純心に接し，交流する楽しさ，語らいの楽しさを知り，交流を満喫し，交流のスキルを少しずつ高め，農家の純朴さ・人情味といった魅力をそのまま保持したまま無理なく自然に交流能力を身につけるようになっている。

② このような農家民宿は，その交流の発展として，一般客も受け入れることができる農家民宿となっており，ビジネス的にお仕着せで客と接する嫌みがなく，自然に，地域外の人達に心を開いた姿勢や交流能力をつけている。

つまり，子供を含む地域外の人達との素朴な交流により，地域外の人とのかかわりの楽しさを覚え，その地域の人達がもっと地域外の人達とかかわりたいと活性化され，そうした中で，地域外の人達とかかわるスキル，すなわち交流のスキルが自然に向上し，その地域の魅力やその地域に住む人達の魅力を発信する能力が磨かれていくことが分かった。

勿論，当時は，ここまで明確に交流の重要性を把握していたわけではなく，何となく感じていたに過ぎない。とはいえ，交流と言うことであれば，大学は，人々が出会い，学ぶ場であるので，学生達を通じて，地域の人達との交流を試み，どのような交流の仕方が地域の人達との交流に適しているか考えていくことには最も適していると思った。このため，私は，授業で地域との交流を目指す交流型授業を何とかして試みたいと思った。

その交流型授業の形態や内容を決定する上で，最も参考となったのは，2010 年 12 月にゼミで上田に旅行に行き，長野大学環境ツーリズム学部の古田睦美准教授のゼミと交流したときのことである。古田ゼミが在来の地場大根の復活に取り組み，その取組みが農林水産大臣賞を受賞したことに対して，そこまで大学のゼミが地域に貢献できるのかと感銘を受けたが，同時に，古田ゼミの女子学生が上田の旧市街地の活性化の支援の一つとして，旧市街のガイドを試みていることが大変印象的で

あった。

そのガイドの様子を見ると，専門家的でなく，説明が下手であっても可愛く見え，素人的であることがガイドされる人々に親しみを与え，気さくに話しかけることができる雰囲気をもたらし，魅力的であった。このガイドの様子を見て，私は，学生がガイドを体験する授業を試みてはどうかと思った。

これであれば，学生達が，単にその地域を知識として知るのみならず，ガイドするからには，その地域について得た知識を咀嚼し，分かりやすく説明する必要があり，その地域を具体的に知ることになる。そこでの体験は，学生がその地域に関心を持ち，地域の人達と交流し，地域に入り込むきっかけを与えると思った。見沼地域を対象にどのように授業を設けるか数ヶ月にわたり悩んだが，やっと，これだと思う授業のあり方を発見したと思った。

5　交流型授業の試み

学生達が見沼をガイドする体験授業として，2011年度前期に半期2単位の授業として，その期に限った特殊講義「見沼の緑地保全と地域社会」を設けた。この授業は，経済学部の専門科目であり，学生達には卒業単位となる授業科目である。当初，この授業科目だけを設けることしか考えていなかったが，この授業がきっかけとなって，2011年度後期もさらに後続の交流型授業を試みることになる。結局，2011年度は，次のような交流型授業を試みることとなった。

①前期　見沼ガイド体験授業（特殊講義「見沼の緑地保全と地域社会」）

②後期　紙芝居創作・実演授業（特殊講義「見沼の緑地保全と交流」）

③後期　足尾銅山鉱毒被害地訪問授業（特殊講義「環境思想と地域社会」。この授業は，その受講生が田中正造と宮澤賢治を学ぶ社会環境設計論特論の受講生を案内補助して，田中正造と関係のある足尾銅山鉱毒被害地を訪問する授業である。）

次に，見沼ガイド体験授業とその後続の交流型授業がどのよう展開されたか紹介する。

(1)　見沼ガイド体験授業

この授業は，多くの学生が見沼地域の歴史，文化及び自然を短時間で総合的，体系的に知り，その知識を駆使して，現地でガイドを体験し，学生達が地域の人達とかかわってみたいと思うきっかけとすることを目的とする。その内容等は，次のとおりである。

ア　授業の内容

①　授業形態

教室での講義のほかに，現地訪問を3回実施した。

まず，教室での講義については，受講生が見沼地域を短時間で総合的，体系的に知るため，10回分の授業を割り当てて，経済学部の教室において，見沼の緑地保全にかかわっておられる市民活動団体の積極的なご協力を得て[21]，ゲストスピーカーに見沼地域の歴史，自然及び文化を講義してもらった。ゲストスピーカーは，見沼田んぼの保全活動に取り組んでこられた市民活動団体のリーダーや学識者にお願いした。

現地訪問については，次のとおり，全3回にわたって実施し，土曜日又は祭日のほぼ1日を利用した（現地訪問は，1日6時間以上に及ぶので，少なくとも教室での1時限の講義の2回分以上に相当する取扱いとなる）。

現地訪問の実施内容
第1回目（4月29日（祭）） 学生達がまず見沼田んぼの全体像を把握することを目的として実施した。設立されたばかりの見沼たんぼ地域ガイドクラブのガイド会員（以下，「社会人ガイド」という。）の方々に，見沼田んぼの主要な箇所を徒歩で午前10時から午後4時頃まで学生達を6〜7名毎の班に分けてガイドしてもらった。

第2回目（6月4日（土）） 社会人ガイドの方々に第1回目と同様の班別編成でほぼ同様のルートを再度ガイドしてもらい，学生達がそのガイドの模様を見ながら，第3回目に自分達自身でガイドする箇所やそのガイドの内容をどうするか考え，決めさせることを狙いとして実施した。
第3回目（6月25日（土）） 学生達が自分で実際にガイドすることを体験することになる現地訪問である。学生達は，当日用意したガイド資料に基づき，これまでの現地訪問とほぼ同様の班別編成で，班内の学生達全員がガイドを体験した。 学生達がガイドを終える毎に，適当な場所とタイミングで班内において講評を行わせた。

②　受講者数の規模

埼玉大学経済学部のできるだけ多くの学生が受講し，見沼地域を知ることが理想であるので，受講者数の制限は設けたくなかった。しかし，この授業では，受講学生が現地訪問し，見沼田んぼ地域ガイドクラブの社会人ガイドの方々に班別に分かれてガイドしてもらうことを考えると，受講者数の制限を設けざるを得ず，受講者数を60名程度に制限した。当初想定した班編制は，1班の構成を次のとおりとし，6班の編制とすることを考えていた。

1班の構成：学生10名，社会人ガイド2名，
院生等2名

1班の学生数を10名としたのは，前述のグリーンツーリズムの調査で，ボランティアガイドの方に何名程度の規模の案内が適切かと質問したら，10名との返答が戻ってきたことによる。1班の社会人ガイド数を2名としたのは，見沼田んぼは，歴史が長く，史跡も多く，また，その自然について説明することが多いので，見沼の歴史，文化及び自然を1名の社会人ガイドで全て説明することは難しいことによる（6班編制を当初想定していたので，社会人ガイドは最低12名必要と考えていた）。また，社会人ガイドの方々は，埼玉大学の学生達について十分な情報を持っておられるわけではないこと，現地訪問を円滑なものとするためには，現地で統括する担当教員の私やガイドクラブの責任者が各班と絶えず連絡をとり，適切な指示を出す必要性から，私が指導している大学院生あるいは私のゼミOBを連絡・調整役として各班に2名ずつ配置することとした。

実際に，この授業を開講してみると，受講した学生数は，27名であり，当初の予想の60名を大きく下回り，不人気であったかと落胆したが，受講学生自体は，シラバスを読んで受講しており，問題意識のある学生が多かった。

また，実際のところ，現地訪問を実施してみると，27名程度の受講者数で良かったことが分かった。というのは，学生達が社会人ガイドの方々からガイド内容を的確に聞き，質問する等，社会人ガイドの方々と十分なコミュニケーションをとり，自らガイド体験するための心づもり・準備をするには，1班10名だと多過ぎ，その適正な人数規模は1班6〜8名程度と思われた。しかし，この程度の人数規模であっても，受講者数27名の場合，4班の編制が必要となり，各班に社会人ガイドの方々2名が張り付くと，それだけでも，社会人ガイドは8名必要となった。

もし，当初予想した60名程の学生が実際に受講すれば，1班6〜8名とすると，10班程度必要であり，その場合，社会人ガイドを20名程度確保しなければならない。また，荒天の場合は，その日は現地訪問を実施できないので，全3回の該当日以外に予備日（翌日等の日曜日）についても事前に担当の社会人ガイドの方々に日程を空けておいてもらう必要があり，仮に，当初予想どおり60名程度の学生が受講していたならば，ガイドクラブにもっと大きな負担をかけていたことになった。

イ　途中での変更点

授業を実際に実施してみると，途中で，当初予定していたことを変更すべき点が出てきた。その主なものは，次のとおりである。

①　ガイド箇所の選択

当初は，各班の予想学生数10名に合わせて，あらかじめ特定のガイド箇所10カ所を決めてお

き，また，それぞれの箇所に対応するガイド・テーマも決めておいて，各班内で，学生達に特定のガイド箇所10カ所から1カ所とそれに対応するガイド・テーマを選ばせることとしていた。しかし，実際に現地訪問してみると，むしろ，学生達がこれまでガイドしてもらったルートの中で，自分でガイド箇所とガイド・テーマを自由に決める方が学生達にとって自主的，主体的にガイドを試みられるだろうと考え直し，ガイド箇所やガイド・テーマについて，一切制約をつけずに，学生達が各自自由に決定できることにした。

②　ガイド・シナリオの作成

当初は，学生達のガイド・シナリオ作成が成績評価ために必須と考えていた。しかし，模擬的にガイド・シナリオを試作させ，説明させてみると，シナリオの棒読みとなり，その場の雰囲気に合わせたアドリブを交えた柔軟な対応ができないことが分かった。ガイドする場合，ガイドされる相手方の様子に臨機応変に対応し，うまくコミュニケーションをとっていく必要があるので，ガイド・シナリオではなく，臨機応変に対応できる手持ちのガイド資料をつくらせるにとどめることにした。

③　見沼地域の人達へのヒアリング

第1回目の現地訪問において，見沼地域を散歩している一般の人達が足を止めて，学生達が何をしているのか尋ねる光景が見られたので，これらの一般の人達が見沼地域をどのようにとらえているのか学生達にインタビューさせることを思い立った。また，これは，学生達のインタビューの練習になるので丁度良いと思った。

このため，2回目と3回目の現地訪問のときに，学生達にインタビューさせることとしたが，学生達が見沼地域を訪問している人にインタビューをすると，見沼という場所がくつろぐ雰囲気の場所であることと関係して，学生達が少し質問しただけで，喜んでいろいろ答えてくれて，学生達はそのことに好印象を持った[22]。

この授業は，地域の人達との交流を狙いとするものであったが，学生達にガイド体験させることばかりを考えていたので，当初は，インタビューを通じて，学生達が見沼地域を訪問した人達と会話し，交流することまでは，全く考えが及ばなかった。

写真2　見沼でのガイド体験（1）

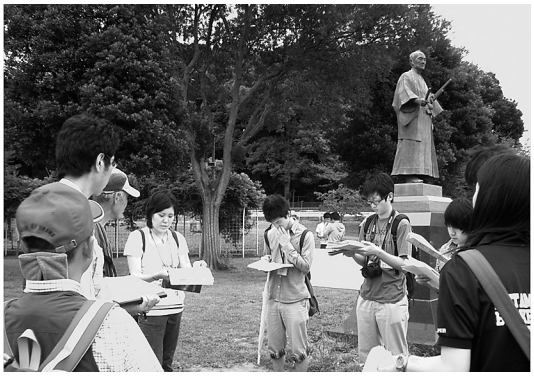

写真3　見沼でのガイド体験（2）

ウ　学生達のガイド体験とその感想

学生達がうまくガイドできるか心配であったが，総じて，学生達は，自分なりに工夫してガイドを試み，ガイド体験を楽しんでおり（写真2及び3参照），中には，紙芝居を利用してガイドし，見沼の魅力を表現しようとする学生も現れた。

また，各班において学生達がガイドした後，各班内でそのガイドぶりをどのように評価するか，その課題は何か等を，各班内の社会人ガイド，院生・OB，学生達で講評し合うようにしたが，皆で講評し合う中で，学生達がお互いにどこが不十分か気づき始め，ガイドのあり方について考えを深め，お互いを認め合いながら，しっかりとした話しぶりになっていく姿が認められた。

学生達がガイドを体験した直後に，その感想を自由記載形式で求めたところ，その主なものは，次のとおりである。学生達がガイドすることの難しさや緊張感を感じる中で，ガイドとは何か考察を深め，ガイドする楽しさを感じていることが分かる。

- 緊張したけれど，意外と楽しかった。
- ガイドを通じて自分の意見を人に伝えられるのは楽しかった。
- 知識とコミュニケーション能力，この２つが大切と感じた。
- 調べたことをまとめて短時間で話すのは難しい。その場の空気などによって予定していた内容を調整して発表できるようにしなければいけないと思った。
- 人前で話をするという経験が不足していたため，事前に話そうと考えていたことと，実際に話せたことには大きな乖離が生じた。
- 身近な場所に歴史や文化があることを再認識した。

ガイド体験をしたある女子学生は，「見沼の歴史を学ぶだけでなく，自分から発信することによって知識が自分のものとなって，これが勉強だと感じました。……緊張しながらも楽しんでいる自分がいました。……人前で話すのがとても苦手な私にとっては自信につながりました」との感想を記載している。これは，ガイドを体験した学生達が感じたことを全体としてうまく言い表していた。

そして，ガイドクラブの方々からも，若い学生達と共有できる時間が持て，若返った気持ちになり，また，この体験が今後のガイド活動のあり方を考える上で参考になったとの感想をいただいた。

エ　授業の成果

①　ガイドの意味・意義の把握

学生達は，ガイドする場合，単にガイド箇所の客観的かつ具体的な知識を必要とするのみならず，ガイドされる相手方とのコミュニケーションが重要であることを感じ取っている。前述の学生達の感想においても，「知識とコミュニケーション能力，この２つが大切」，「その場の空気などによって予定していた内容を調整して発表できるようにしなければいけないと思った」としている。

また，ガイドをする者は，ガイド箇所について，自分が得た知識を咀嚼して，自分の思いや感想も適度に交えながら，人に分かりやすく話し，人に感動を与える説明をする必要があると考えられる。学生達は，前述の感想に見られるように，ガイドを体験したことが緊張の中の楽しさと感じ，達成感や自信を感じおり，ガイドをすることは，人前での単なる説明ではなく，それを超えた自分の思いも込めた自己表現・自己実現であることを感じとったと思われる。それ故に，学生達はガイド体験で達成感を強く感じたといえよう。

②　従来の授業と異なる交流型授業の体験

ガイドをすることは，相手の存在を意識し，相手の状況に即応して，関係する知識を構成して話す知的で自主的な作業であり，教室の講義のような受身のものとは異なる。また，調査や単なる研究のように，自己の都合や利益に沿って作業していく，自己中心型の学びでもない。地域を知り，ガイドする相手方との交流・意思疎通が最初から求められており，自己の社会性を自然に高めていく交流型の学びといえる。そうした意味で，学生達は，従来の講義やゼミとは異なる授業を体験したといえる。

③　人との固有名詞での出会いの重要さ

ガイドというと，観光地でビジネスとして提供される観光ガイドがすぐに想起されるが，学生達は，ガイドを体験してみて，そのような職業ガイドを想起すると同時に，ビジネスではなく人と交流することに主眼をおいたガイドの意味・意義も感じとってくれたのではないかと思う。

ビジネスとしての観光ガイドは，基本的に，話す内容が専門化・洗練化されており，標準化されている。そのことが同じ品質のサービスを大量に匿名の人達に供給することを可能にしているが，これは，あくまでも市場経済の中での標準化されたサービスの売買取引の対象となるものである。そうした商売・取引行為の中では，ガイドは，観

光サービスとしての標準ガイド・サービスを販売しているのであって，個人として固有名詞でガイドされる人と向かい合い，人格的に出会い・つながることを期待し，あるいは期待されているわけではない。観光ガイドは，その観光サービスの販売とその販売量の増大に関心があるだけといえる。

しかし，この授業で求められるガイドは，地域を知り，その地域とのかかわりの中で固有名詞で人と出会い，意思疎通し，交流することを狙いとするものであり，観光ガイドとは性格を異にする。学生達は，商売・取引行為では基本的に期待できない固有名詞での人と人との出会いやつながりがこうしたガイドによって可能になること，それが本当は地域おこしにとって重要ではないかということを，この授業をきっかけに少しは気づいてくれたのではないかと思う。

④　地域社会と大学の結びつきを深める契機

学生が単位を取得できる形で地域とかかわれてこそ，大学が地域とシステム的につながるといえる。この授業を受講した学生達は，ガイド体験を通じて，より身近に地域を実感し，地域との交流を現実的なものとして感じることになったと思われる。

最終回の授業時に，アンケート調査を実施したところ，受講生27名のうち24名が回答を寄せた。その中で，見沼田んぼ地域に関心を持っていた者は，表1のとおり，わずか2名に過ぎなかった。しかし，この授業の受講後，見沼田んぼ地域に関するイメージが変化したかとの質問に対して，19名の学生が，イメージが変化したと回答し，その自由回答欄で，そのうち14名が，関心が深まった旨回答している。

さらに，「この授業を受講し，もし，将来さいたま市の見沼田んぼ地域の近くに住むことが経済的条件・通勤的条件から可能であるとしたら，この地域に住みたいと思うようになりましたか？」との質問に対して，「思うようになった」と回答した者が何と10名に達し，「受講する以前からそう思っていた」と回答した2名を合わせると，見沼田んぼ地域に住みたいとする者が12名も存在する。

この結果を見て，私は，授業を工夫することにより，学生達の地域への関心・好奇心が引き出され，大学が地域とより深く結びつくことが可能になると強く感じた。また，社会人ガイドの方々は，60歳代以上であり，この授業で，孫の世代にあたる学生達とかかわられ，前述のとおり，楽しい刺激を受けたとされ，また，学生達にとっても，この方々とのガイド体験という協働作業は，核家族化した家庭で育った彼らにはなかなかできない

表1　見沼への関心と受講後の見沼へのイメージの変化

		受講後の見沼に対するイメージの変化の有無				計
		ア　変化した	アの中で，より関心が深まった人数	イ　変化しなかった	ウ　わからない	
受講前の見沼への関心	ア　大変持っていた	1	0	0	0	1（　4.2）
	イ　持っていた	1	1	0	0	1（　4.2）
	ウ　名前は知っていたが関心はなかった	5	5	2	0	7（ 29.2）
	エ　見沼田んぼ地域の存在を知らなかった	12	8	1	2	15（ 62.5）
	オ　その他	0	0	0	0	0（　0.0）
計		19（ 79.2）	14（ 58.3）	3（ 12.5）	2（　8.3）	24（100.0）

（注）　最終回（2011年7月6日）の授業時に実施したアンケートの集計結果による。

体験であった。少子高齢化の中で，生産年齢人口に頼って暮らしを維持する時代から，老若男女が協働して暮らしを維持する必要性のある時代に移りつつあるが，こうした授業で若者が高齢者との協働作業を体験し，地域社会を考えることは重要であると思われた。

オ　課　題

この授業に対する学生の満足度は，前述のアンケート調査において，回答のあった24名のうち，「大変満足した」と回答した者が9名，「満足した」と回答した者が13名，「ふつう」と回答した者が2名であった。「満足していない」あるいは「全く満足していない」と回答した者はなかった。この授業を受講した学生達の満足度は高かったといえる。

しかし，この授業を実施して感じた最大の問題は，現地訪問が3回と多く，荒天の場合の予備日も含めると，実施日の3日と予備日の3日，計6日をあらかじめ日程として空けておかねばならず，教員側とガイドクラブの方々の日程面での負担が極めて大きいことであった。しかも，実際に現地で引率可能な学生数は，この授業の受講者数を少し超えたせいぜい30名程度が限度であり，それを超えると，社会人ガイドの確保，現地での統率等が困難になると思われた。

したがって，結論的には，多くの学生達に見沼地域を知ってもらうとすると，見沼地域の歴史と自然と文化の講義はそのまま残し，教室で学生達に短期間で総合的・体系的な知識を得させることを中心とし，現地訪問は1回のみとし，それにより見沼地域がどのようなところか実感させれば，見沼の入門授業としてはそれでやむを得ないと思われた。その上で，この入門授業の上級授業として，ガイド体験授業等の少人数の授業を設け，そこで交流型授業をしっかり満喫させるべきであろうと思われた。

⑵　紙芝居創作・実演授業

見沼ガイド体験授業を2011年度前期に実施し，2011年7月19日に，その成果を経済学部のFD（Faculty Development）委員会のセミナーで報告した。その中で，前述の課題も報告したが，報告を終えてから，後期で，何としてもこの課題を少しでも解決し，交流型授業のあり方をさらに探求したいと思い，急遽，同年度後期の授業として，紙芝居実演・創作授業（特殊講義「見沼の緑地保全と交流」）と足尾銅山鉱毒被害地訪問授業（特殊講義「環境思想と地域社会」）を設けることを9月の教授会で認めてもらった。

紙芝居実演・創作授業を思いついたのは，見沼ガイド体験授業で，紙芝居を利用してガイドしようと試みた学生が2名いたためである。その一人の教養学部学生の鎌田諒君は，見沼の室町時代からの伝え語りとされる「見沼の笛」[23]を題材にして，紙芝居の形で見沼の魅力を表現しようと試みていた。それを見て，紙芝居は，見沼の昔の姿とそこでの人々の暮らしがどうであったか，時間・空間を超えて具体的に見える形で総合的に伝えられる優れた交流手段であると感じた。ガイドという手段以外にも，見沼地域の魅力を素朴な形で適切に表現・発信していく方法があるのではないかと思い始めていたところであったので，是非，同年度後期に授業として紙芝居をとりあげてみたいと思った。また，これであれば，前期の見沼ガイド体験授業の後継の上級授業にもなり，同時に，前述の同授業の課題の解決を試みることにもなると思った。

ア　授業の内容

①　授業形態

この授業は，見沼ガイド体験授業の後継上級授業であり，また，交流を重視していることを明らかにするため，授業の科目名を特殊講義「見沼の緑地保全と交流」とした。授業は，主として紙芝居に焦点を当て，教室での講義や簡単な実習に加えて，紙芝居創作・実演のために必要な現地訪問も適宜入れることにした。

紙芝居のゲストスピーカーは，紙芝居の専門家であり，さいたま市役所前の通りでカフェギャラリー「土瑠茶（ドルチェ）」を営んでおられる子ども文化研究家の中平順子（なかひらよりこ）さんにお願いし，紙芝居の創作・実

演の指導をしていただいた。すでに，中平さんには，2011年1月にさいたま市役所に所用で立ち寄ったとき，偶然，大学院生達と中平さんのお店に入り，知る奇遇に恵まれていたので，この授業を構想しようと思ったとき，再度，大学院生達と訪問し，絵本や紙芝居のご活動の話を聞いた。そのとき，中平さんは，これまでの人間愛に溢れた人生を語られるとともに，紙芝居こそ，心を響かせ合う交流の方法として極めて質の高いものであると力強く語られた。私は，確かに紙芝居は，前述のとおり，小さな子に理解でき，しかも，見沼の人々の暮らしや魅力を時間と空間を超えて具体的に見える形で総合的に伝えられる優れた交流の手段だと思った。

②　受講者数の規模

この授業は，見沼ガイド体験授業の後継上級授業であり，紙芝居の創作・実演も入るので，少人数授業の形をとることとし，25名程度を予定した。実際には，15名の学生が受講し，そのうち8名が見沼体験ガイド授業の履修者であった。受講学生達は，シラバスをよく読んでいて，熱心にこの授業に参加した。

イ　途中での変更点

①　授業内容を紙芝居の創作・実演に集中

授業では，紙芝居以外にも見沼の魅力を総合的に表現し，見沼地域との関係で人々の交流を促進する手段は何かを考えたかったので，当初，授業の対象を紙芝居だけに限らず，影絵も授業の対象としていた。しかし，実際に影絵の専門家に授業のゲストスピーカーとして来ていただき，講義と実演をしてもらったところ，紙芝居よりも授業にとり入れることは難しいことが分かり[24]，結局，この授業は紙芝居に集中することにした。

また，これとも関係して，当初は，紙芝居の創作・実演も，教室の中だけで，時間をかけずに学生達が簡単に入門体験できる程度でよいと考えていた。しかし，中平さんから，紙芝居を創作し，上演する以上，しっかりしたものをつくり，上演しなければいけないと指摘され，中平さんの熱意ある懇切なご指導をしっかりと受けることになった（関心の強い学生達は，授業時間外にも，中平さんのご自宅で創作・実演の指導を受けた）。この結果，学生達は，紙芝居の創作・実演に必要な次の一連の作業をしっかり体験することができた。

脚本の検討・作成
↓
脚本に対応した絵の描き上げ
↓
実演用紙芝居の手作りによる作成
↓
作成した紙芝居の実演

創作の対象としたものは，前述の「見沼の笛」である。「見沼の笛」は，見沼地域の語り伝えであり，見沼の周辺の水田化が進み，龍神が怒って美女となり，妙なる笛の音で働き手の農家の若者達をさらっていくという話である。 見沼ガイド体験授業では，前述のとおり，鎌田諒君がこの話の各場面に合う絵を自己流に描いて，簡単な紙芝居を作成していた。この授業では，この「見沼の笛」を本格的な紙芝居にするため，この授業の受講生でもある鎌田君がまず脚本案をつくり，それを，この授業の受講学生全員が議論し修正して，脚本をつくり上げた。そして，その脚本の各場面に対応する絵を経済学部4年の澤田茉那美さんが描き，全12枚からなる立派な絵に仕上げた。その後，これを実演用の作品とするため，絵や脚本を電子ファイル化し，それらを紙芝居の大きさに印刷し，全員が協力してその印刷された絵や脚本を台紙の画用紙に綺麗に貼り合わせ，作品を完成させた[25]。

この絵を担当した澤田さんは，埼玉大学図書館報の2012年3月15日付け『武蔵野』第11号において，「作画にあたって，一番苦労したのは風景画」だったとし，どうしようかと悩んでいると，中平さんから「紙芝居は背景を描かなくても観ている側の想像力に任せるため，白い背景でも成り立つ。同じ理由で抽象画を描いても良い」とのアドバイスを受け，画面を全部絵で埋めようと思っていた彼女は，その言葉に大変驚き，「完璧に描

かなくても良い，むしろそれが良いのだと知った私は，そのおかげでのびのびと絵を描くことができました」としている。また，「見沼の笛」は，室町時代の頃の話なので，「江戸時代の新田開発より少し前の，見沼がまだ沼地だった頃の話と想定し，登場人物の服装や住居，地形などの自然について想像力を働かせました」とし，「これは見沼の過去と現在を比較する良いきっかけとなりました」としている。そして，「純粋に紙芝居として観ていて楽しいように，人物の表情はなるべく豊かに描くように努めました」とし，この「紙芝居に込めた思いは強いものとなりました」としている[26]。

② 学長と大田先生を迎えての紙芝居「見沼の笛」の上演

私のゼミ生や前記見沼ガイド体験授業の受講生が，2011 年 11 月 25 日，大田尭先生のドキュメンタリー映画「かすかな光へ」を上映し，併せて，大田先生と上井喜彦埼玉大学学長を招いて見沼について語り合う見沼イベントを埼玉大学内で開催することを予定していた。多くの埼玉大学学生・教職員や見沼の市民団体の方々がそのイベントに出席するので，この機会を利用して，学生達が完成させた「見沼の笛」（作品の正式の名称は，「見沼のふえ」となっている。）をそこで上演することにした。これは，学生達にとって，紙芝居「見沼の笛」を創作するモチベーションをさらに高める効果を持った。

この上演においては，「見沼の笛」の脚本を担当した鎌田君が実演することになり，絵を描いた澤田さんは，それを傍らで見守っていたが，このときの様子について，澤田さんは，「紙芝居をイベント本番では，鎌田さんが『見沼の笛』を演じるのを傍らで見守っていました。当日お越しくださった多くの方々の反応がどのようなものになるのか，不安と期待でいっぱいでした。制作した紙芝居が実演されるのを見ながら，私は紙芝居の魅力について気付くことができました。それは，紙芝居は人に観てもらって初めて完成するということです。つまり，紙芝居を介して人との繋がりが生まれるのです。演ずることによって，初対面である会場の方々から共感を得，距離がぐっと縮まるのを感じました。また学生が演じるため，その未熟さや素人っぽさがさらにその効果を高めていると本城先生が仰っていました。イベント終了後，紙芝居を見て下さった方からさっそく『当時，サクラソウはあったのだろうか』とご指摘を頂いたことがその証ではないでしょうか。紙芝居を通して，その場にいる人たちの間には世界観を共有，共感する不思議な関係が生まれるのです」と，紙芝居を完成させ，上演できたことの達成感と紙芝居の交流手段としての魅力を見事に述べている[27]。

③ 紙芝居の保育園での実演練習

当初は，紙芝居の実演は，単に授業において教室内で学生達に簡単に実演させることしか想定していなかった。しかし，前記見沼イベントで急遽「見沼の笛」を上演することになり，その予行演習の必要性から，埼玉大学学内保育施設の「そよかぜ保育室」や近隣の市立保育園で実演させることにした。このとき，学生達は，自分達の「見沼の笛」のみならず，既存の紙芝居も用いて園児達の前で練習をした。

紙芝居には，物語型の紙芝居と紙芝居を見ている子供達が参加して場面が進行していく参加型の紙芝居の 2 種類がある。「見沼の笛」は物語型の紙芝居に属するが，子供達の興味を引き出しやすいのは参加型の紙芝居である。このため，園児達の前では，まず既存の参加型の紙芝居を演じてか

鎌田諒君（脚本担当）と澤田茉那美さん（絵担当）

写真 4　紙芝居「見沼の笛」

写真5　保育園での紙芝居の実演

ら，次に既存の物語型の紙芝居か「見沼の笛」を演じることにした。

この保育園での紙芝居の実演練習は当初全く想定していなかった。学生達は，最初は戸惑ったが，実際に演じてみると，園児達が楽しそうに反応してくれて，紙芝居の面白さを満喫することになった。私も，学生達が素晴らしい表情で紙芝居を演じていた姿が忘れられない。学生達が大学構内では見ることのできないような本当に優しい表情をしていて，園児達の童心と響き合っているようであった。

ウ　学生の紙芝居創作・実演体験とその感想

「見沼の笛」を前記見沼イベントにおいて大田先生と上井学長の前で演じたのは鎌田君だけであった。しかし，保育園での実演練習は，ほぼ全員の受講学生が最低1回以上体験し，これが学生達には大変印象的で，満足度の高いものであった。実演を体験した学生達に対してアンケートを実施したところ[28]，この授業の受講学生15名のうち，9名が回答を寄せた。回答者数は少なかったものの，「保育園で紙芝居を実演して，有意義であったと思いましたか？」との質問に対して，回答者全員の9名が「そう思った」と回答し，「そう思わなかった」や「何ともいえない」と回答した者はなかった。その自由記載欄には，次のとおり，紙芝居の実演体験が意義深いものと感じたとする記載が回答者9名全員に見られた。

- 実演する前は，自分には向いていないと思っていたが，実演してみると，意外に楽しめた。このような機会がなければ，紙芝居の楽しさを感じることはなかっただろうと思う。（女子学生）
- 紙芝居の持つ「双方向性」のお陰で，園児と楽しく「交流」できた。日常で，園児と触れ合う機会は無く，貴重な体験ができた。（男子学生）
- 幼児の素直な反応を通じて，自分の表情や表現を客観的に分析するきっかけを得られた。（男子学生）
- 所属している学部上，子どもたちと接する機会はほとんどない。それゆえに子どもに対する恐怖心というか不安が少なからずあったと思うが，紙芝居を実演することによって，その子どもに対する心のバリアがなくなっていったと思う。それは，いずれ親になることを考えれば，とても大切なことだと感じる。（女子学生）

また，「保育園で紙芝居を実演して，最も印象深かったこと，最も強く感じたことは何ですか？」との質問に対する自由形式の回答においても，同様に，次のとおり，学生達が園児達の反応に感動している記載が見られた。

- 参加型の紙芝居で，保育園の園児たちが，予想以上に盛り上がってくれて，一緒に楽しむことができたことが印象深かった。（女子学生）
- 偽りのない本当に楽しそうな笑顔を見られた。（男子学生）
- 幼児の純粋で素直な反応が印象深く，こちらも素直な表情で演じることができた。（男子学生）
- 子どもたちは，自分たちが思っているよりも素直で賢いということ。私たち大人が，少し無理のある話かな，子どもたちには難しいかなと不安に思う話も，子どもたちは自分なりに理解して，きちんとリアクションをとって

くれる。（女子学生）

さらに，同アンケートのその他の自由回答欄においも，次のように，学生が紙芝居に魅了されている記載が見られた。

- 幼児は大人が思っている以上に，話の内容や整合性に敏感で，それらを理解しようと努力していると感じた。そういった思いを紙芝居を演じる際に強く感じたので，こちらも子供向けだからといって，決して子供だましにならないように全力で演じることができた。（男子学生）
- 実践の場を設けるときに，対大人だけで終えないこと。子どもに実演してこそ，紙芝居の魅力はわかると思う。（女子学生）

エ　授業の成果

①　子供との出会い

このアンケート結果からも分かるように，学生達は，保育園で紙芝居を実演練習して，幼児達と感動的な出会いをし，幼児達の魅力を実感し，幼児と接する良さや幼児の可能性を知ることとなった。学生達は，保育園で紙芝居を見ている幼児達の笑顔や生き生きとした素直な反応に出会って，子供が単に個々の家庭の中で愛される存在であるのみならず，子供が社会的に大切な存在であり，社会の中で健全に育って欲しいと思える存在であることを感じ，社会的視点から子供の良さをとらえる良い機会となったといえる。

また，学生達自身おいても，子供達の純真さに惹かれ，そのことで自分自身をとらえ直し，自己の可能性を把握し直す機会にもなったと考えられる。前述の鎌田君は，紙芝居が「自分と作品の両方に向き合う必要がある演じ方の世界は奥が深く，学生は自分と向き合うよい機会となったと思います」としている[29]。他方，澤田さんは，「紙芝居は老若男女分け隔てなく内容を理解できるため，難しい学問と違って親しみが湧きやすいということです。また観る側の感性に任せるという点でも親しみやすさがあります。一方で，紙芝居は演じ手にとって自己表現，自己実現の最適なツールでもあります。演じ手は読む時の演出をどうするか，自分の思いをどう発信するか考えます。それが自己表現，自己実現に繋がるのだと中平さんは仰っていました。……保育園での実演の中で，普段ではなかなか見られない学生の飾らない姿や笑顔を垣間見ることができました。紙芝居は観ている側だけでなく，演じ手を成長させ，素の魅力を引き出す力があると思います」[30] とし，紙芝居には演じ手を成長させる魅力があることを指摘している。

私は，中平さんから，紙芝居をしている上演者の顔は素晴らしい顔になっていると聞いてはいたが，百聞は一見にしかず，本当にそのとおりであった。前述のとおり，学生達が大学内では見せることのない柔和な素晴らしい表情をしていて，生き生きとした園児達の心と響き合っているようであった。紙芝居は，演じている学生達が本来持っている優しさを見事に引き出すと痛感するとともに，紙芝居は，素晴らしい質の高い心の交流手段であると思った。

②　地域社会を実感

紙芝居による幼児達との出会いを通じて，学生達は，年齢的に離れた子供達を身近に感じ，そのコミュニケーションの可能性を感じることができたと思われる。保育園という地域社会の場で，財布（経済活動）から一番遠い幼児達との紙芝居での交流を通じて，具体的に地域の暮らしが学生達の視野に入ってきて，経済よりも広い社会の存在，つまり地域の暮らしや地域社会が経済活動よりも広いことを実感したのではないかと思う。前期の見沼ガイド体験授業を受講した学生達の場合，その授業で祖父の世代にあたる社会人ガイドの方々との交流をすでに経験している。学生達は，生産年齢以外の経済活動に直接関わっていない人達，つまり，高齢者や子供の存在を具体的に意識し，その人達も含めて地域の暮らしが成り立っており，老若男女が共に励まし合って生き，協働して暮らしを維持し，地域社会を盛り立てていく必要があると感じとるよいきっかけになったと思う。

経済学部の場合，経済活動に直ちに結びつく売

買等の取引関係から社会を捉えがちであるが，この授業を実施して，むしろ，暮らしや地域社会という広い視野から経済活動を逆に捉え直すことも経済学部の学生あるいは教員にとって重要ではないかと思った。

オ　課　題

この授業を実施して，紙芝居は小さな子に理解でき，しかも，見沼の姿とそこでの人々の暮らしを時間と空間を超えて具体的に見える形で総合的に伝えられる優れた方法であると思った。紙芝居によって，地元の人達や地元の大学生達が素朴な形で見沼の魅力を表現できること，それこそ個々人に立脚した本当の地域おこし，人おこしではないだろうか。できあいのものではなく，手作りの地元ならではの方法により，見沼の魅力を真心を込めて伝える。素朴な思いに多くの人達が引きつけられ，見沼地域で出会いとつながりが生まれる。その自然の中で，高齢者から若者，幼い子供達まで心が響き合う。これこそ，大田先生のおっしゃっておられる見沼フィールドミュージアムの営みではないかと思った。

この授業で，紙芝居「見沼の笛」を制作するとき，たまたま絵を描くことが極めて上手な女子学生の澤田茉那美さんがいてくれて助かったという思いがあった。しかし，絵が下手であっても，むしろ，学生達が真心を込めてつくれば，その下手なところが紙芝居を見ている人達に親しみを与え，また，質問し易くし，交流を促進することになると考えられる。紙芝居の交流型授業をさらに試み，人と人が柔和に出会い・つながる優しい社会を取り戻す，そうした地域おこしの試みの授業に発展させられればと強く思った。

⑶　足尾銅山鉱毒被害地訪問授業

前期に見沼ガイド体験授業を実施して分かったことは，多くの学生達を引率して現地訪問する場合，学生達を現地に効果的に引率・案内し，現地で円滑に移動するためには，班別で行動する必要があるということである。そして，学生数が多ければ多いほど，その班の数を増やさざるを得なくなり，引率・案内役も多くせざるを得ない。

前期の見沼ガイド体験授業の場合，受講者が多ければ，引率・案内役の社会人ガイドが多数必要となり，また，3回も現地訪問を実施したので，社会人ガイドにとってはあらかじめ該当日の日程を空けておく必要がある等，負担も大きくなるという問題があった。現地訪問は，学習効果が大きいが，その実施は容易でなく，この点の改善が最大の課題であると思われた。このため，多くの学生を現地訪問させる場合，見沼ガイド体験授業の課題のところで述べたとおり，現地訪問は1回にとどめざるを得ないというのが結論であった。

そこで，この現地訪問を1回にとどめるとしても，それでも，多くの学生達が参加する場合には，やはり引率・案内役を多くしなければならず，必要な引率・案内役数の確保，謝金の支払額の増大といった問題がなお残る。この問題の改善を図る方策がないか気になっていたところ，この引率・案内役の役割を学生にかなりの部分担わせて，問題の改善を図れないか，また，そうすれば，引率・案内役を担う学生が見沼ガイド体験授業以上に自主性や積極性を持って学習や交流に意欲を持つ効果が期待できるのでないかと思った。

丁度，2011年度後期に開講されることになっていた経済学部の常設科目の「社会環境設計論特論」は，私が担当し，前述の舘野廣幸さんを非常勤講師として田中正造と宮澤賢治を学ぶ授業内容となっていた。この授業の学習効果を高めるため，田中正造については，教室での講義のほかに，足尾銅山鉱毒被害事件にかかわる地域を1回だけ現地訪問することを考えていた。このため，この授業の開講時間の直前の時限に，田中正造を詳細に調べ，引率・案内役を部分的に担える学生達を養成する授業を設け，この学生達に「社会環境設計論特論」の受講学生達を現地訪問において引率・案内の補助をする役割を担ってもらってはどうかと考えた。また，この授業に前期で見沼ガイド体験授業を経験した学生達の多くが受講すれば，この授業が見沼ガイド体験授業の発展・応用授業としての役割も果たし，前期のガイド体験をどのように活かし，発展させるか，上級授業のあり方・

課題も探れると思った。

ア　授業の内容

この授業は，「社会環境設計論特論」の受講学生達を現地訪問において引率・案内することを補助する学生の養成を狙いとし，社会環境設計論特論の開講時間である水曜日5時限の直前の同曜日4時限に設定し，この授業の学生達が社会環境設計論特論も併せて受講しやすいようにした。

見沼ガイド体験授業は，見沼という地域に焦点を当てたガイド体験授業であったが，この授業は，学生達が田中正造の生き方・思想を深く学び，社会環境設計論特論の受講学生達を引率・案内補助するガイドとしての役割を果たすことを狙った授業であり，人に焦点を当てたガイド体験授業といえる。

地域を知るためには，その地域の歴史，文化及び自然を全体として体系的に学ぶ必要があるが，見沼ガイド体験授業を実施してみて，地域をよく知るためには，むしろ，その地域にかかわった人に着目し，学習者が，その人物の生き方を詳しく知り，学んでいくことにより，その地域の特徴やその地域の歴史をより一層リアルに把握できるのではないかと思った。その人間のその時点その時点での生き様を同時代的に学習者の内面に再現し，自分であればどう生きるか自分に問いかけて想像することが，学習者にとっては，その地域の特徴やその時代状況をリアルに捉え，深くその地域のことを理解できるようなると思われたのである。このため，この授業は，人物の生き方と思想，それと地域社会とのかかわりに焦点を当てていることが分かるよう，科目名を特殊講義「環境思想と地域社会」とした。

①　授業の形態

教室の授業では，学生が田中正造の生き方・思想を深く学ぶため，必要な文献を読み[31]，報告し，討論するというゼミ学習の形態をとるとともに，「社会環境設計論特論」の受講学生達を12月17日（土）の現地訪問で引率・案内する補助をするため，現地を下見し，当日の現地訪問に備えさせることとした。現地訪問の案内自体は，田中正造と足尾銅山鉱毒被害事件を専門的に調査研究してきた市民団体の学識者2名[32]にお願いし，学生達にはその引率・案内の補助を担当させた。

②　受講者数の規模

この授業は，学生達が「社会環境設計論特論」の受講学生達を現地訪問において引率・案内することを補助する役割を担うことを狙いとするので，学生達がゼミ形式で田中正造の生き方・思想を集中的に深く学び，社会環境設計論特論の受講学生達をガイドできる程度にその問題意識を掘り下げている必要がある。このため，20名程度の少人数授業とした。また，前述のとおり，ガイド体験をすでに経験している方が望ましいので，前期の見沼ガイド体験授業を履修していることが望ましいとした。

実際に受講した学生数は，20名であり，ほぼ予定どおりの受講学生数であった。ちなみに，受講学生数20名のうち，13名が見沼ガイド体験授業の履修生であった。

他方，社会環境設計論特論の受講学生数は，59名であった。現地訪問では，借り上げた観光バス2台程度でこの受講学生達を現地に運ぶことを予定していた。

イ　途中の変更点

大きな変更点は無かったが，現地訪問の1ヶ月前に現地を下見してみて，現地訪問を円滑に実施し，満足度の高いものとすることは極めて難しいことが分かった。現地訪問の当日のルートやスケジュールのみならず，案内の仕方を余程うまく組み立てないと，参加した社会環境設計論の受講学生達から大きな不満が出ると予見された。

というのは，現地訪問に足尾精錬所跡等の足尾地域と田中正造の旧宅とその遺品が展示されている佐野市立郷土博物館等が存在する渡良瀬川下流地域の双方を1日で訪問すると，その訪問ルートは極めて長距離になり，訪問時間が早朝午前8時頃から午後7時30分頃まで長時間にわたることが分かったからである。しかも，時間をかけて見学を満喫するだけのめぼしい箇所がほとんどないので，バスの中で長距離の道のりをただ座って長

時間費やすだけという印象を与えかねないことが分かった。つまり，田中正造の旧宅や佐野市立郷土資料館にいる時間はそれぞれ1時間もなく，足尾地域に至っては，時間をかけて見学するめぼしい箇所がなく，足尾精錬所跡はほとんど取り壊されて煙突が残っているだけで，しかも敷地外からただ見るだけである。まして，社会環境設計論特論の受講学生達は，相互に知り合っていて親しい関係にあるわけでは全くなく，そのような見ず知らずの人達が長時間のバス内でただ缶詰状態で座っているだけでは，参加者は到底耐えられないであろうと，私のみならず下見をしたこの授業の受講学生達も非常に心配した。

このため，バスの中で社会環境設計論特論の受講生達が退屈しないように，この授業の受講学生達が趣向を凝らさなくてならなくなり，どのような方策があるか，この授業の受講学生達と時間をかけて検討した。その結果，この授業の受講学生達が，バス車内で，社会環境設計論特論の受講学生達に対して，次の事項について，田中正造の生き方・思想や訪問箇所の意義を簡潔に分かりやすく説明する形で，当日現地訪問で案内してもらう2名の学識者に質問し，回答してもらい，当日参加した学生達が田中正造の生き方や足尾銅山鉱毒事件の本質が容易に分かるものとしようということになった。

① 足尾銅山鉱毒被害の実態とその汚染地域
② 田中正造と村落の自治と国家
③ 田中正造の倫理観の形成
④ 戦後も続いた足尾銅山鉱毒被害と水俣等の戦後の公害事件との比較
⑤ 田中正造と非暴力思想
⑥ 近代国家の人権抑圧と環境破壊，古河等の財閥の蓄財
⑦ 田中正造を農の営みからとらえる意味・意義

また，足尾地域には，足尾精錬所からの煙害により甚大な被害を受け，廃村となった旧松木村のあった松木渓谷があり，その惨状が今も残っており，見学に相応しい箇所と考えられた。しかし，ここに車両で立ち入るためには，その渓谷を走る道路を管轄する国土交通省の渡良瀬川河川事務所にその通行許可を申請する必要があり，許可を得て立ち入ることになれば，さらに，その渓谷に立ち入っている時間が1時間程度は必要であった。このため，松木渓谷に立ち入れば，さらに1日の訪問時間が延びてしまうという問題があったが，現地訪問のハイライトになる箇所なので，高速道路をできるだけ利用して訪問時間全体の縮減を図ることにして，当日の訪問箇所に入れることとした。

ウ　現地訪問とその感想

当日の現地訪問に参加した学生数は33名であり，そのうち，この授業の受講学生は17名であった。当初，借り上げる観光バス台数は2台程度と見ていたが，参加学生数が少なかったので，借り上げ台数は1台で済むことになった。

当日の現地訪問がどのような展開になるか，社会環境設計論特論の受講学生達が現地訪問に満足するか大変心配であったが，この授業の受講学生達がバス車内で2名の学識者の方々を丁寧に紹介するとともに，準備した資料で前述の質問する事項の背景や質問の趣旨を説明し，その上で，学識者の方々に質問をした。これが，当日参加した社会環境設計論特論の受講学生達に大きな満足感を与えた。バス車内での田中正造や足尾銅山鉱毒事件の学習を促進し，引率される学生達が訪問箇所を見学する意義や意味を把握するのに役立った。

現地訪問実施後のアンケート調査においても，出席者33名のうち，21名が回答を寄せ，「あなたは，田中正造旧宅，足尾銅山鉱毒跡などを現地訪問した授業に満足しましたか？」との質問に対して，表2のとおり，回答者全員が「大変満足した」，「満足した」と回答し，現地訪問の満足度が高かったことが分かる。

また，この授業において受講学生が現地訪問においてバス車内で司会や質問をして，案内の補助をしたことは適切だったかとのアンケートの質問に対しては，社会環境設計論特論の受講学生の回答者13名のうち，「適切だったと思う」とする回

表 2　現地訪問の満足度

	現地訪問参加者全体	社会環境設計論特論の受講学生	この授業の受講学生
ア　大変満足した	16	9	7
イ　満足した	5	4	1
ウ　ふつう	0	0	0
エ　満足しなかった	0	0	0
オ　全く満足しなかった	0	0	0
計（回答者数）	21	13	8

（注）アンケートは，2011 年 12 月 21 日の社会環境設計論特論の授業時に実施した。そのアンケートの集計結果による。

答が 10 名，「適切ではなかったと思う」とする回答が 1 名，「分からない」とする回答が 1 名，無回答が 1 名であった。この中で，「適切でなかったと思う」と回答した者も，自由記載欄で，「あそこまで負担をかけてバスの中のレジメを準備するのも大変だろうと思った。もっとイージーでもよいと思う」と書いており，この授業の受講学生の負担が大きいことから「適切ではなかったと思う」としているに過ぎないものであった。この授業の受講学生達のバス車内での対応が適切であったことが分かる。

そして，「適切だったと思う」と回答した者の自由記載欄には，「テーマ毎の解説に実があり，先生への質問も適切であった」，「レジュメの形で短くまとまっており，それを参考に話が聞けてわかりやすかった」，「大変良く準備，企画されており，当日の実施も円滑であった」といった記述が見られた。

エ　授業の成果

現地訪問から戻って，私とこの授業の受講学生達が最も気になったことは，足尾銅山鉱毒事件にかかわる史跡等の遺産がとり壊されて，消失しつつあることであった。つまり，近代産業による環境破壊と被害の原点であるこれらの負の遺産が保存されないで，足尾銅山鉱毒事件が一般の人々から忘れられていくという危惧であった。

現地訪問した学生達に最も衝撃的であった光景は，足尾の松木渓谷に入って彼らが見た光景であり，過去の足尾製錬所による煙害を直接受けたすさまじい爪痕が今も残り，破壊されたままの荒涼

写真 6　現地訪問（松木渓谷）

とした風景であった（写真 6 参照）。しかし，この松木渓谷も，国土交通省の渡良瀬河川事務所の許可なしには一般の人が車で立ち入ることができない。また，関係する博物館等の学習施設が全く不十分であり，同事件とその悲惨な被害を体系的，総合的に把握することが極めて困難な状況にある。しかも，それらは，連携・ネットワーク化されておらず，足尾と渡良瀬川流域に個々に点として存在するだけであり，一般の人々が同事件とその被害の状況を容易に理解できるように全くなっていない。

この授業の受講学生達は，こうした実情を知って，負の遺産を後世まで残し，一般の人々がその悲惨さを忘れないようにすることがいかに難しいか痛感するに十分であった。

このため，現地訪問から戻ってからは，残りの授業時間全てを足尾銅山鉱毒事件の史跡等をどうしたら保存できるか，その方策の検討に費やすこ

とになった。学生達も，文化財保護法や自然公園法を調べ，文化財や国立公園の対象できないか調べる等，検討作業に精力を傾けた。

その検討作業において，学生達からユニークな意見が出された。例えば，足尾銅山鉱毒事件とその被害の全体像を把握することを容易にする環境学習の拠点として，既存の県立博物館その他の学習施設は全くその任を果たせていないので，新たな学習拠点を足尾銅山鉱毒事件の象徴的な場所である渡良瀬遊水地付近に設けてはどうか。松木渓谷と足尾製錬所跡等の負の遺産を一つのエコツーリズムの対象としてとり上げ，これら負の遺産とそれと隣接する江戸時代から豊かな自然が残る中禅寺湖，日光東照宮等の地域を比較対照しながら，近代産業によるすさまじい環境破壊を学び，近代化のあり方を考える新たなエコツーリズムが実施できないかといった意見が出された。

学生達が熱心な議論をし，保存の方策をとりまとめる内容が世間に公開しても意義のあるものと思われたので，私は，そのとりまとめた結果を，足尾銅山鉱毒事件の史跡等の保存方策に関する要望書にして，学生有志として，関係する行政機関の長に提出してはどうかと考えた。学生達もその必要性を感じ，2月9日に私の簡単な経緯説明文を付して，要望書を環境大臣や栃木県知事などの関係行政機関宛に郵送した。そのことは，2月11日の埼玉新聞に「埼大生環境相らに要望書を提出」という見出しの記事でとりあげられ，学生達が要望書において「日本の公害の原点である足尾銅山鉱毒事件は，今後二度と産業による環境破壊と被害が発生しないようにするためにも，忘れられてはならない大変重要な事件。関連する遺跡等は保存され，一般の人々に分かるよう公開されるべきだ」としていると報じられた。現地を案内いただいた田中正造研究の学識者の方々も，学生達がここまで真剣に考えてくれたことに，大変喜んでおられた。

この授業の受講生に対して，授業の最終回（2012年1月25日）にアンケートを実施したところ，回答者は11名であり，その全員が「あなたは，この授業に満足しましたか？」との質問に対して，「大変満足した」と回答した。また。「この授業で最も印象的だったこと，心に残ったことは何ですか？」と自由回答で質問したところ，次の回答が寄せられ，この授業の受講学生の学びが深かったことが分かる。

- 現地訪問に向けて受講生皆で当日のことを考えたり，知識を深めていったことがとても心に残りました。（男子学生）
- 現地に行くことで感じること，学ぶことの多さを実感しました。また，一人一人が役割を果たす中で，学びをみんなで深めていくことができたことが，感動的でした。（女子学生）
- 自ら企画して実践する楽しみを実感できたと思います。（女子学生）
- 田中正造という一人の人物を通じて，人物像・後生につたえるための具体的な手法・正義とは何なのか等，様々な広がりを持って考えることが出来た。（女子学生）

オ　課　題

この授業は，受講学生にとって大変満足度の高い，また，充実感のある授業であったといえる。また，この授業の受講学生達は，現地訪問に積極的に自主性を持って対応し，現地訪問に参加した社会環境設計論特論の受講学生達もその対応に満足した。この授業の受講学生達は，現地訪問の引率・案内の補助の役割を見事に果たしたといえる。その意味で，先に述べたこの授業の狙いであった，現地訪問において，「引率・案内役を学生にかなりの部分担わせて，……引率・案内役を担う学生が……自主性や積極性を持って学習や交流に意欲を持つ効果が期待できるのではないか」という点は一応達成された。

しかし，問題は，社会環境設計論特論の学生でこの現地訪問に参加した学生がわずか13名に過ぎなかったことである。多くの学生を現地訪問で引率・案内するというには程遠い。今回の成功は，幸いにも参加学生が少なかったことが影響していることが否定できず，今回のような対応で，一体，現地訪問に参加する学生数をどの程度まで増やす

ことが可能なのかがはっきりしない。この点が残された課題といえよう。

6　交流と大学の役割

⑴　有機農業の優れた思想性

有機農業は，前に述べたように，単なる農法ではなく，その本質は有機的関係性にあり，交流を重視し，自然と調和し，自立と互助に立脚した社会のあり方を示すものと捉えられる。私は，有機農業の関係者に出会ったとき，その雰囲気の中から，直感的に，そうした有機農業の優れた思想性をおぼろげながら感じ取っていたのであろう。このため，私は，埼玉大学経済学部で授業科目として経済法を担当する者でありながら，ゼミや授業で有機農業をとりあげようと強く思ったのだと思う。

当初は，ゼミ合宿で夏休み期間に有機農家に泊まり込み，有機農業の現場を体験することから始まり，有機農業の座学の授業である特殊講義「有機農業と暮らし」を設け，さらに，座学に大学構内で堆肥づくりや有機野菜の栽培を体験させる簡単な実習を加えた授業の特殊講義「有機農業と社会思想」を試みた。その後に，大田先生との出会いがあり，グリーンツーリズムの調査で得た知見を利用して，2011年度前期に学生達を見沼とかかわらせる交流型授業として見沼ガイド体験授業を実施することができた。また，同年度後期には，その成果を踏まえ，交流型授業のあり方をより深く探求するため，紙芝居創作・実演授業と足尾銅山鉱毒被害地訪問授業を試みることができた。幸運というほかないが，このような授業を展開できたのは，経済学部が地域おこしの探求に適した学部であり，とりわけ，社会のあり方を探求できる社会環境設計学科に所属していたことによる。

しかし，それだけではない。有機農業が思想として優れていることが，何よりも私にゼミや授業で有機農業をとりあげ，さらにその授業形態を発展させようとする気持ちにさせたといえる。その優れた思想性をもう少し付言してみると，次のとおりである。

①　非暴力性

有機農業は，優しい眼差しで，畏敬の念を持って自然に接し，地球上の生命体と共に生き，天地の恵みに感謝して暮らす農の営みである。殺生を最低限にし，地球上の生命体とともに生きる営みである。これは，自然に対する非暴力の思想であり，自然を人間の生きる手段として考え，人間の利益のために生命体を殺傷し，搾取することをはばからない近代の人間中心主義とは根本的に異なる。この非暴力性，つまり，生命体全体への博愛主義が人々の共感を呼ぶのだと思う。

②　交流性

生命体全体への非暴力性から，人と人との関係も，非暴力であるべきだということが当然帰結される。そして，人と人との関係が非暴力であるためには，人と人の意思疎通・相互理解が不可欠であり，交流ということが極めて重要になる。日本の有機農業思想の形成に貢献した一楽照雄や日本有機農業研究会が，消費者と生産者が顔と顔の見える関係の中で交流・協働・学習することを重視し，有機的な人間関係を発展させる「提携」を提唱したことは，この当然の論理的帰結でもあったといえよう。

一楽や日本有機農業研究会の提唱する有機農業思想は，虫や微生物等の生命体を殺傷する農薬等を用いない，つまり自然への非暴力のみならず，人への非暴力も含み込むものである。人への非暴力は，一楽が「食べ物は商品ではない。食べ物や農業を金儲けの手段としてはならない」と主張していることに典型的に見られるように，経済面での暴力，つまり市場経済や企業社会の攻撃性，暴力性を問題とする。商品の売買関係は，打算で取引しているというだけの打算の関係であって，人と人との出会いやつながりには結びつかず，人格と人格が出会い・つながり，交流し合い，心を響かせ合うことにはならない。「提携」に見られる有機的関係性は，そうした関係性ではなく，現代経済社会の攻撃性・暴力性から抜け出そうとする関係性である。

提携は，自然の恵みに感謝し，人々を結びつけ，人々が相互に思いやる基盤となる。地域自給の中

で，人それぞれが自立性・自主性を持ち，思いやりを持って他者と結びつき，困った場合にも互助し合う社会的結びつきである。こうした有機的関係性が自然にも，人にも優しい社会環境を形成することにつながるのであり，一楽らは，この有機的関係性を有機農業の世界の本質と見ているのである。

③　コミュニティー性

社会において有機的関係性が存在することは，換言すれば，その社会にコミュニティーが存在していることを意味する。人々が自主性，自立性を維持しながら，想像力と思いやりを持って，お互いに助け合う。そういうコミュニティーが有機農業の営みを核として成立している社会のあり方が，一楽らの有機農業思想から自ら導き出される。

一楽らが提唱した「提携」は，国際的にも有機農業関係者に，“TEIKEI”という言葉で紹介され，その言葉でどのようなものか理解される。特に注目されるのは，この提携が，まず米国に大きな影響を与え，1990年代後半以降，CSA（Community Supported Agriculture, コミュニティーが支える農業）と呼ばれる有機農業が発展してきたことである。

このCSAは，有機農家と消費者が直接結びつき，顔と顔の見える関係の中で，農場に近い地域の消費者が支える農業である。CSAの概念を作り上げ，それを全米に広げることに献身したロビン・バン・エンは，「生産者＋消費者＋毎年の支え合い＝CSA及び数えられない可能性」と表現している[33]。米国連邦農務省のエコノミストは，CSAについて，「消費者は，向う全シーズンの当該CSA農家の収穫を予約し，事前にその支払を済ませておく。取決めに基づいて，消費者は，農家の生産リスクを分担するとともに収穫の多寡（特にとれ過ぎ）の如何にかかわらず引き取ることになっており，時々，農場における催しとその他の社会的活動に参加することが求められる」としている[34]。

米国でCSAが発展した理由は，米国では，個人の利己主義が進んで地域社会が解体し，その反動として，地域を取り戻す必要があるという気運が少しずつ出てきたことが挙げられる。CSAは，有機農家と都市生活者がパートナーシップを組み，地域社会と自然と食の安全を取り戻そう，コミュニティーを取り戻そうという動きである。当時，米国では，有機農産物の認証制度が普及し，カリフォルニア州等の大規模な有機農家が認証マークを付した有機農産物を安い価格で州を越えて販売するようになり，小規模な有機農家がこれに価格面で太刀打ちでなくなり，一般の流通ルートから撤退せざるを得ない状況が生じた。このため，これらの有機農家は，近くの消費者と直接結びつくことを選び，顔と顔の見える関係の中で，新鮮な有機農産物を提供し，自然とのふれあいや有機農業の現場を知ってもらうこと等により消費者の信頼と満足を得るCSAへの道を選択することとなったのである。この米国でのCSAの発展は，欧州にも波及し，英国，フランス等でも同様の動きが展開されており，有機農業のビジネス化に抗する動きとして，国際的にも注目される大きな動きになっている。

交流を促進して，コミュニティーを形成していく。そのコミュニティーにおいては，有機農業の営みを核とする地域自給の中で，自然と調和し，人々が自主性，自立性を維持しながら，想像力と思いやりを持って，お互いに助け合うことが基本とされる。有機農業は，こういうコミュニティーを取り戻す，あるいは形成する，そうした優れた思想性を持っているのである。

日本においては，コミュニティーを自分達でどう形成するか，自治的社会をどう築くか，第2次世界大戦後においてすら，そのことを真剣に考え，実現させようとする問題意識が育ってきたとは言い難い。都市は，ただの人の集まりに過ぎず，コミュニティーからは程遠い。また，農村の集落は，旧態依然としている。このコミュニティーをどう形成し，地域を再生していくのか。これこそ，グローバル化が進展し，地域が疲弊し，人々がますます孤立していく中で，大学が知恵を出して貢献していく緊急性のある重要な課題ではないだろうか。

⑵　大学の役割

大学は，学びのための語らいと集いの場である。しかし，この場が交流の場になっているとは言い難い。20歳前後の特定の世代に授業というサービスを提供しているに過ぎない実情があり，一方的に講義を聴いているだけで受講している学生間には交流がほとんどなく，まして地域と交流し，地域に向かってコミュニティーを形成して行こうとする雰囲気もないのが実情である。

しかし，前述の見沼ガイド体験授業等の交流型授業の試みをご覧いただいて分かるように，授業を工夫して，学生が単位を取得できる形で，地域に入っていくきっかけを与える授業をすれば，学生が活性化し，地域と交流しようとする雰囲気が醸成できる。その場合，ガイドや紙芝居といった簡単な交流のスキルを持つことも重要であり，それが地域の人達とコミュニケーションをとり易くすることに注目する必要がある。また，そのスキルも，専門化，洗練化されている必要性はなく，むしろ，素人的である方が，その下手なところが紙芝居を見ている人達に親しみを与え，話しかけ易くし，交流を促進する。地域の人達と学生達が柔和に出会い・つながる優しい地域社会を取り戻す。そうした地域おこしが大学を核として可能になるのではないだろうか。こうした交流があれば，コミュニティーの形成も容易に進むように思われる。

その場合，人々の出会い・つながりを演出できる交流のスキルとしてはどのようなものがあるか，また，その交流の場が，庶民的な雰囲気で誰もが入り込め，しかし，気がつけば質の高い交流と学びの場になっているとするにはどういう要件が必要か等について，高いレベルでの実践的な考察が必要である。そうした実践的な考察は，高等教育・研究機関である大学の場だからこそ容易にできることであろう。

特に，埼玉大学経済学部の場合，夜間主コースがあり，また，社会人大学院の経済科学研究科が設けられている。地域の社会人の方々が学びやすい場となっている。地域の社会人の方々が学生となって，一般の学生達と一緒に，交流型授業で地域と交流すれば，より地域との協働が容易になり，もたらされる成果も大きいに違いない。定年退職された社会人の方々が社会人大学院において交流型授業で学べば，卒業後は，優秀な地域の活性化・地域おこしのイノベーターあるいはコーディネーターとして活躍し，また，交流型授業を支援する人材ともなり，授業内容のより一層の充実と，一般の若い学生達が地域に入り込むことをより容易にするであろう。埼玉大学経済学部は，本学の中でも地域おこしを最も取扱いやすい学部であり，市民活動の人材も豊富な人口120万人の政令指定都市のさいたま市に所在し，同市内で魅力的な位置を占める見沼という広大な緑地空間に近い点で，大きな発展の可能性を持っていると思う。

む す び

有機農業の営みを核とする自然にも人にも優しい自治的社会，そうしたコミュニティーの形成を目指す。この有機農業思想の到達点ともいえる考え方は，非常に重要な意味を持っているように思われる。戦前の足尾銅山鉱毒事件，戦後の公害に見られる近代産業による悲惨な環境破壊と住民の健康被害は，近代国家が成立し，近代所有権が確立していく中で，川や多くの山林等が国家によって管理・所有されたことにより，自然の大元がコミュニティーによる自治的な管理から外されてしまい，国家が産業に有利なように都合良く自然を管理・支配できたことが関係しているように思われる。田中正造がなぜあのように国と古河に対して闘ったのか。それは，江戸末期に名主として集落を守る立場にあった経験を持つ田中正造にとって，国家が産業と癒着し，国策で産業に都合の良い政策を推進し，昔から集落によって自治的に守られてきた自然とその集落自体を平気で破壊し，農民の暮らしを奪い，甚大な被害を与えていることが許せなかったからだと思われる。近代に入って，自然の自治的管理が破壊され，それ以降，それに代わるコミュニティーによる自治的管理も形成されず，近代化・軍事化の中で自治意識やコミュ

ニティーを形成する問題意識も醸成される状況になく，戦後は，企業社会化の進展の中で，個々人がますます孤立していった。

こうした状況の中で，有機農業の営みを核とする自然にも人にも優しい自治的社会，コミュニティーの形成を目指す考え方は，前述の舘野廣幸さんが指摘するように，「広大で深遠な世界観の転換」であり，生命や自然の法則に沿った世界に農業や社会や生き方を変えるものであると私も思う。そして，そうした自然にも人にも優しいコミュニティーを形成するためには，意思疎通・相互理解が不可欠であり，人々の出会い・つながりを演出できる交流が極めて重要である。この交流を確かなものとするためには，人々の出会い・つながりを演出できる交流のスキルとして何が適切なのか，また，その場が，誰もが入り込め，気がつけば質の高い心の響き合いと学び・協働の場になるにはどういう要件が必要か等について，高いレベルでの実践的な考察が必要である。それは，大学で最も取り組みやすい事柄であって，埼玉大学のような地域から期待されている大学が地域の人達と協働し，学生・教職員が地域にしっかり入り込める交流型授業を実践し，地域の人達と学生・教職員の自由闊達な議論を通して，その考察・知見を深めていくことが重要ではないかと思うのである。

大田先生は，「いろいろな動物が学習を重ねて自分を環境に適応させている」，「学習というものは，生存と共にあり，生存の中の一部，少なくとも欠くことのできない一部だということを位置付けることができるのだと思うんです」[35] とされ，学びは，人間が生きていく上での不可欠なものであり，「生きてある生命の活動」とされる。この「学び，生きる」という重大な意味をしっかりと捉える必要がある。

大田先生は，「人間というのはみんな，自分を生きる，という根元的な生物としての事実と，他者と支え合わなければならないという，内と外に向かう真反対のベクトルを持ち合わせています。……そこのあいだを選びながら」[36]，個々の人間が個々の人生のドラマを創って育っていくのであり，それは芸術，アートである[37] とされる。人が，この他者との響き合いの中で生き，自分を知り，その社会性を発達させるためには，自由闊達で，人と自然を思いやる優しいコミュニティーが形成されていることが何よりも必要であると思う。大田先生は，「ただ利己主義の自分を知るのではなくて，他者とのかかわり合いの中の自己を知るということが学習の終点ではないかと思うのです」[38] ともされている。

「共に学び，人を含む全ての生命と共に生きる」，そのことを理解する心優しい，社会性に優れた人材を送り出し，そうしたコミュニティーの形成に寄与することは，大学の重要な役割であると同時に，大学が持つ大きな可能性ではないか，交流型授業の試みを通じてそう思った次第である。

《注》

（1）　桝潟俊子・久保田裕子著／国民生活センター編『多様化する有機農産物の流通』，学陽書房，1992年3月，10頁。

（2）　白根節子『たかが菜っぱの話から』ダイヤモンド社，1979年12月，196–197頁及び178頁。同「食卓から“農”を問う」，日本有機農業研究会編『消費者のための有機農業講座2　食卓から暮らしを問う』JICC出版局，1981年12月，17–18頁。

（3）　星寛治「共生社会を拓く有機農業運動」，日本村落研究学会編『有機農業運動の展開と地域形成』農山漁村文化協会，1998年3月，93–95頁。

（4）　荷見武敬『有機農業に賭ける』日本経済評論社，1991年2月，1頁。荷見は，この後続けて，「……研究会の探求しようとする『在るべき姿の農法』を簡潔に表現する呼び名として『有機農業』という名称選択がなされたのである。この呼び名自体は，アメリカのロデイル…の流れをくむOrganic Farmingという表現の直訳ともいえるが，現行の化学農法があまりにも無機的であることへの反語的意味合いを含めて，本来有機的であるべき農業に，いささか同義語反復的に『有機』という表現を重ねたのだとされている。このネーミングにあたっての直接の名づけ親は，前記研究会の首唱者であった一楽照雄」であるとしている。一楽も，この「有機農業」との呼称について，「ほんとうはこうした特別の呼び方をすべきではなく，正しい農業とか，真の農業とでもとなえるべきものである。それは，今日の農業が近代化の迷信に災いされて，あまりにも不健全な状態に陥っているの

で，これを本来あるべき姿の農業に引き戻そうとするもの」であり，「有機農業という呼称を，1971 年秋，有機農業研究会を結成するにあたって，筆者らの発案で使いはじめたのである」としている（一楽照雄「日本農業転換への道　有機農業の提唱」（1975 年 5 月）（日本有機農業研究会『有機農業運動資料 No. 1　有機農業の提唱』，1992 年 10 月，4 頁所収）。

（5） 一楽照雄「有機農業の取り組み＝報告に入るまえに」協同組合研究月報 No. 271 所収，1976 年 4 月。

（6） 日本有機農業研究会・注（4）前掲『有機農業運動資料 No. 1』48 頁，69 頁，67 頁及び 26 頁。

（7） 一楽輝雄「運動に協同組合思想を」（日本有機農業研究会・注（4）前掲『有機農業運動資料 No. 1』）16 頁。

（8） 一楽照雄の著作をまとめて収載した『暗夜に種を播く如く　一楽照雄-協同組合・有機農業運動の思想と実践』（発行・㈶協同組合経営研究所，発売・㈳農山漁村文化協会，2009 年）では，「提携の理念」は，「一楽が長年にわたって追求してきた協同組合思想を根底にすえ，より本質に迫った思想の到達点でもある」としている（285 頁）。

（9） 前掲注（8）『暗夜に種を播く如く』93-94 頁。

（10） 舘野廣幸さんは，2008 年度から 10 年度までの各後期開講の特殊講義「有機農業と暮らし」と 2011 年度後期の社会環境設計論特論の非常勤講師を務められた。舘野さんは，現在，日本有機農業研究会の理事であり，日本有機農業学会の理事でもある。

（11） 舘野廣幸『有機農業　みんなの疑問』筑波書房，2007 年，9 頁。

（12） 舘野廣幸「生産者から見た提携の意味」，日本有機農業研究会『腐植がつなぐ森・里・海の「提携」ネットワークをつくろう　「流域自給」と「提携」から広がる有機農業』2010 年，20 頁。

（13） 舘野・注(12)前掲 21 頁。

（14） 舘野・注(11)前掲 10-11 頁。

（15） 埼玉大学経済学部本城ゼミ『共に学び 共に生きる ── 埼玉大学とゼミの思い出 ──』2012 年 2 月，25-26 頁。

（16） 日本有機農業研究会は，「昔ながらの堆肥づくり用の『堆肥框』を活用して，家庭から出る生ごみを落ち葉や雑草と混ぜて堆肥化することで，温暖化防止キャンペーンを市民自らの手で進めるものです」として，「堆肥わくわく運動」と呼んでこの堆肥框による堆肥づくりを提唱している。（http://www.joaa.net/mokuhyou/promote-index.html）

（17） 前掲注(15)『共に学び 共に生きる ── 埼玉大学とゼミの思い出 ──』70 頁。

（18） 筆者がまだ公正取引委員会事務局に勤務していた 1984 年頃から数年間，東京都立大学人文学部の故小沢有作教授のゼミに出入りしていたことがあり，そのときに，大田堯先生の存在を知る機会があった（前掲注(15)『共に学び 共に生きる ── 埼玉大学とゼミの思い出 ──』7 頁参照）。

（19） 大田堯『かすかな光へ』一ツ橋書房，2010 年，23 頁。

（20） 大田・注(19)前掲 46-47 頁。

（21） この授業の企画から実施に至るまで，北原典夫さん（見沼たんぼの環境資産を創造する会事務局長）と島田由美子さん（見沼ファーム 21 理事長）に大変お世話になった。

（22） このインタビューについて，受講学生達に，「本授業は，見沼を知り，地元の方々と交流できる学生交流型ガイドを目指している」との趣旨を明らかにし，質問例を入れる等のインタビュー実施要領をつくって，あらかじめ周知しておき，第 2 回目と第 3 回目の現地訪問後に，学生達からインタビュー結果の報告を求めた。

（23） 「見沼の笛」は，『LOVE 浦和　ふるさと浦和のいまむかし』（浦和市発行，1988 年）の 106-108 頁に見沼地域の伝え語りとして収められている。

（24） 影絵は，暗い中で上演するため，そのための照明や舞台装置を必要とし，また，主人公の人形や背景が場面毎に異なる姿・形で必要となる等，紙芝居と比べられないほど，用意しなければならないものが多く，到底 2 単位程度の授業で取り上げられるものでないことが分かった。

（25） 「見沼の笛」の作成経過については，埼玉大学図書館のホーム頁の中の図書館報「武蔵野」第 11 号（2012 年 3 月 15 日）において，教養学部学生の鎌田諒君が「見沼で輝く埼大生の個性」（17-18 頁）で，経済学部学生の澤田茉那美さんが「見沼たんぼと紙芝居 ── 意外と奥が深い日本特有の文化 ──」（18-20 頁）で詳細に紹介しており，併せて，その 12 枚からなる作品全体も一挙掲載されている（21-25 頁）。

（26） 澤田・注(25)前掲 19-20 頁。

（27） 澤田・注(25)前掲 20 頁。

（28） 保育園での紙芝居体験に関するアンケートは，2011 年 11 月 30 日の授業で実施した。

（29） 鎌田・注(25)前掲 18 頁。

（30） 澤田・注(25)前掲 20 頁。

(31)　基本文献として，1990 年 1 月～3 月に NHK 教育テレビの市民大学講座で使用された由井正臣『田中正造 ── 民衆からみた近代史 ──』（日本放送出版協会）を使用した。

(32)　この 2 名は，渡良瀬川研究会副代表の赤上剛氏と田中正造大学事務局長の坂原辰男氏である。

(33)　Elizabeth Henderson, *Sharing the Harvest* (Chelsea Green Publishing Company, 1999), p. 3.

(34)　Carolyn Dimitri and Catherine Greene, "Recent Growth patterns in the U. S. Organic Foods Market," (USDA, 2002), p. 3.

(35)　大田・注(19)前掲 52 頁及び 55 頁。

(36)　大田・注(19)前掲 195 頁。

(37)　大田・注(19)前掲 119 頁。

(38)　大田・注(19)前掲 64 頁。

《**Summary**》

Regaining Nature and Society by Communications:

Communication and Collaboration between University and Local Communities

HONJO Noboru

The author has attempted to do so-called communicative lectures during last year in which university is concerned with local communities and university students communicate with people living in the communities. Through the lectures, the author and students had pleasant opportunities to meet with many people in the communities and learn from them. After conducting the communicative lectures, my impression is that the Saitama University, as a national university which may have a significant influence on local communities, will play an important role in revitalizing or forming communities.

Realization of the communicative lectures is deeply related to my past teaching activities. The author was attracted by superior thought of organic agriculture, and conducted lectures and seminars in which students experienced organic agriculture and thought of what organic agriculture is.

The communicative lectures were conducted as follows last fiscal year; In the first semester, students arranged a walking tour of Minuma rice field with their guide. In the second semester, students made and presented a picture-story show. In addition, they visited the area polluted and damaged by the Ashio copper mines.

Students actively participated in the lectures, and discovered the pleasure of communicating with people in the communities. They were led to consider on their own will what community ought to be.

This paper points out that university, through communicative lectures, might assume a significant role of regaining a society which is gentle and friendly to human and nature.

Keywords: Organic Agriculture, Communication, Community